



MAKE NEW STANDARDS.

東海国立
大学機構



岐阜大学

第6号

岐阜大学

国際交流年報

2020



Gifu University Organization for Promotion of Globalization GU-GLOCAL

岐阜大学グローバル推進機構

Table of contents

目次

学長メッセージ

岐阜大学国際交流年報 第6号の発行にあたって

I	国際化推進体制	5
1.	岐阜大学の国際化 policy と vision	5
2.	岐阜大学の国際化推進体制	6
	各部門の活動報告	7
	学内の国際化をサポートする体制（日本語・日本文化教育体制／保健管理体制）	11
3.	海外大学・機関等との学術・学生交流協定	13
	本年度に新規締結した協定大学等	13
	大学間学術交流協定締結大学・機関マップ	16
	部局間学術交流協定締結大学・機関マップ	18
	外国人留学生在籍数	20
	本学学生の海外派遣実績	21
	 トビタテ！留学 JAPAN とは？	22
	本学教職員派遣実績	23
	外国人研究者・来訪者受入実績	23
	国際協力活動（JICA 事業）	24
	短期研修プログラム （サマースクール／Collaborative Video Making Program）	25
4.	国際交流活動	27
	1. 国際協働教育・地域国際化関連	27
	2. 留学推進・国際企画関連	30
	3. 留学生就職促進プログラム関連	32
	4. 日本語・日本文化教育センター関連	33
	学内の国際化の取り組み	35
	留学生就職促進プログラム	37
	岐阜地域留学生交流推進協議会	37
	4 大学連携事業	38
	ユネスコスクール活動支援	39
II	各学部・研究科等の主な国際交流活動	40
1.	教育学部	40
2.	地域科学部	42
3.	工学部	43
4.	応用生物科学部	44

5. 医学系研究科	44
6. 連合農学研究科	45

III 大学の国際化と学生支援 47

COVID-19の流行下における留学生受入に係る体験談

～マレーシア国民大学のJD一期生の声とともに～	リム リーワ	47
コロナ禍における留学生支援	北野 信哉	51
英語による教授法トレーニングプログラムの導入について	松井 真弓	54

IV 資料 62

1. 令和2年度グローバル推進機構名簿	62
2. 協定一覧	64
3. 本学の国際関連活動	67
学長表敬訪問（来訪）	67
学長ビデオメッセージ	67
令和2年度国際関連事業一覧（全体）	67
4. 大学間学術交流協定先との交流状況	69
5. 海外オフィス・研究施設	71
6. 国際共同研究等の採択実績	71
（独）日本学術振興会	71
（公財）田口福寿会	71
7. 留学生の就職支援・留学生の地域貢献	72
8. 令和2年度における広報資材	73

学長メッセージ

私ども岐阜大学は、2020年4月名古屋大学と法人統合を行い、国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学となりました。本機構の目指すところは「地域創生への貢献と国際的な競争力向上を両輪とした発展」であり、東海機構の構成員である岐阜大学の国際活動にかかわるエビデンスとして岐阜大学国際交流年報も旧来から継続して逐年刊行しています。

さて、岐阜大学自体は2016年に始まる6年間の第3期中期目標・中期計画期間において「学び究め貢献する岐阜大学を『人が育つ場所』という風土の中で実現し、地域活性化の『中核的拠点大学』として発展させる」ことを目指してきました。この到達目標を実現するため教育、研究、国際化、社会貢献、大学病院の5大戦略を設定し、それぞれのもとに上記期間中に達成する取り組みを明示して、私ども岐阜大学の将来ビジョン

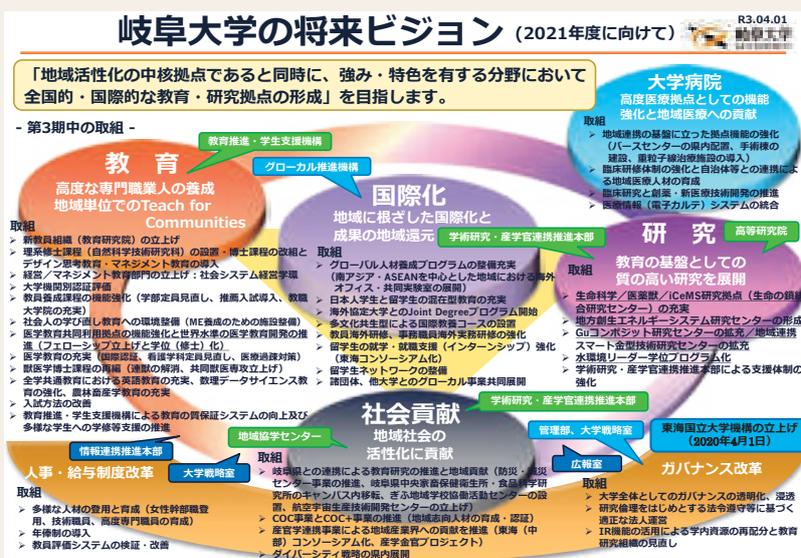
としていきます (<http://www.gifu-u.ac.jp/about/objectives/vision.html>)。とくに国際化の発射台を確認する基礎資料が岐阜大学国際交流年報であり、2016年から刊行が始まりました。東海機構において、岐阜大学が目指す国際化は広く漠然とした国際化ではなく、「地域に根ざした国際化と成果の地域還元」です。日本国内の一定地域と海外の一定地域とが教育、研究、あるいは社会・経済活動についてマッチする課題を共有し、また認識し、それを解決することによって得られる成果が双方の地域振興に結実するという実践的な国際化が目標です。近年しばしば用いられる「グローバル」という言葉が、私どもが目標とする国際化の本質を最も良く表していると考えます。

私どもの主な連携先は南アジア、ASEAN 諸国内の一定地域に存在する大学（群）や企業（群）などの事業体であり、協働によりグローバル人材養成プログラムを整備充実させています。とくに活動拠点として海外オフィスや共同実験室などが有力なツールとして育ってきました。コロナ禍の最中にあった2020年においても、多文化共生型コースの取組、日本人学生・留学生の混在型教育の充実、双方の地域におけるインターンシップの拡充なども限定的とはいえ進行しています。さらに、事務職員まで含めた海外研修制度の整備、留学生を対象とした就職支援の強化なども立ち上げられています。

さらに2019年4月にはインド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学との間でジョイント・ディグリープログラム（JD）も開設されました。このJDという教育プログラムは立ち上げるうえで大変難度の高いものですが、現在日本国内で20本あるJDのうち、岐阜大学が4本、名古屋大学が5本と、約半数を占めています。東海機構の国際化にとって、まさにホールマークと言えます。これらを含め、ポストコロナに向けて各種取組を一層強化しますので、今後とも私どもの展開を、刮目して御期待願います。



岐阜大学長 森脇 久隆



2021年6月3日
岐阜大学長 森脇 久隆

岐阜大学国際交流年報 第6号の発行にあたって

岐阜大学の国際交流に関する年報、「岐阜大学国際交流年報」第6号をグローバル推進機構（GU-GLOCAL）からお届けします。平成31年4月1日に組織改編によって誕生した岐阜大学グローバル推進機構（Gifu University Organization for Promotion of Glocalization: GU-GLOCAL）では、「国際協働教育」であるジョイント・ディグリー（JD）やダブル・ディグリー（DD）などの教育プログラムの発案や運営を行ってきました。また、GU-GLOCALは日本語・日本文化教育センターの機能も担っており、いわゆるリベラルアーツも含めた岐阜大学における国際教育の基幹であり、学長直轄の「特別な全学組織（教職協働モデル組織）」でもあります。留学生の受け入れや派遣もその範疇にあるため、学生への利益や安全を最大限に考慮しつつ、保健管理センターをはじめ、各部局と連携して種々の活動を進めております。

令和2年度につきましては、残念ながら世界中で猛威を振るうCOVID-19のため、サマースクールやESL、ESTといった語学研修プログラムなど、本学からの学生派遣だけでなく、留学生の新規渡日もほぼ全面的かつ全学的に中止となってしまいました。しかし、そのような状況の中でも、オンラインによる英語研修プログラムの実施や、国際月間において実施したVRによる協定大学訪問など、ICTを活用した数多くの試みが実施されました。またJDに関連するウィンター・スクールやスプリング・スクールも中止となりましたが、JDを形成するインド工科大学グワハティ校（IITG）とマレーシア国民大学（UKM）、そして本学の学生がオンラインで協力しあい、多様性を考える動画を作成するCollaborative Video Making Programも開催され、学長も参加する審査員が最優秀ビデオを決定して表彰するなど、好評を博しました。さらにJD活動の一環としてグローバル化のためにSDGs勉強会がリモートで開催されるなど、JDに関連する行事にもICTが活用されています。このJDについて特筆すべきことは、IITGとの国際連携食品科学技術専攻：修士課程において、最初の日本人修了生4名が誕生したことです。3月には修了式が行われ、IITGの教員もインドからリモートで参加しました。また、令和2年度は本学における様々な国際教育プログラムや、それを支援する体制をアピールするための動画を作成し、GU-GLOCALのホームページ上で一般公開して本学のブランド力強化にも務めています。さて、令和3年度でCOVID-19の状況が劇的に改善されることは期待できません。しかしながら、令和2年度にICTをベースとして試行した数々の経験を踏まえ、令和3年度もICTを活用した教育の支援体制をさらに充実させていく予定です。

本年報では、この1年間の大学としての国際活動（含：岐阜大学国際交流ニューズレター記事）、そして各部局における主な国際活動を統合して掲載しましたので、本学の全域において国際化の歯車が稼働していることをご理解いただけたらと思います。

最後に、岐阜大学グローバル推進機構（GU-GLOCAL）は、本学の「地域社会に根差した国際化」の実質化をより一層推進してまいります。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。



グローバル推進機構長
植松 美彦

2021年4月14日

グローバル推進機構長 植松 美彦

I. 国際化推進体制

1. 岐阜大学の国際化 policy と vision

国際化 policy

「国際性を持ち社会に貢献する岐阜大学」

2013年11月21日

今、日本の大学は、学術の場として国際的な関係が問われている。一部の国立大学は、先端科学を志向して、世界の科学技術をリードする研究を行おうとしている。一方で、地域の学びの中心として立脚し、国際性を掲げながら研究と人材育成を展開している国立大学もある。岐阜大学は、このような状況の中で、自らに必要な国際化の policy を打ち出すものである。

「岐阜大学は、学生の主体的な学びを推進し、教育の質保証システムを充実させ、高度な専門職業人の養成と地域単位での Teach for Communities を実現する。理工系の大学院修士課程に、デザイン思考の教育を導入し、リベラルアーツに関する共通教育を重点的に行うことによってイノベーションを支える人材の養成を強く進める。また、国際水準の医学教育開発の推進などに重点的に取り組む。地域に根ざした国際化と成果の地域還元によってグローバル化を実現する。多文化共生型による国際教養コースの設置、日本人学生と留学生の混在型教育の充実、留学生の組織化や就職支援の充実など、国際化につながる施策を推進する。」

この岐阜大学の理念と目標は、「大学が培ってきた科学技術のもとに、豊かな知識と広い視野を持ち社会から信頼される人材を地域に送り出す」という、本学の基本的なスタンスとともに、そのために必要な国際化の意義を示すものである。近年、我が国では、グローバル化が浸透し、人口減少と超高齢化に晒されるようになった。しかも我が国の大学では、海外へ留学する日本人学生数、及び海外からの留学生数が減少する傾向を見せている。語学力とコミュニケーション能力を持つこと、異文化の相互理解など、本学が国際性の追求のもとに培うべき要素は、以前より重要度が増している。

岐阜大学の全構成員は、本学の意図する国際性を達成するために、その教育と研究の基盤を十分に整えるべく努力する。研究面においては、教職員・研究者が世界の舞台で活躍できるよう支援制度と研究環境を実情に合わせて整備し、世界で活躍する研究者を招へいする。これらを人材養成の基盤とするとともに、国際協力を推進し、及び地域に応じた社会連携を推進するために有効な具体策を展開する。教育面においては、日本人学生に対して、国内と海外の事情に通じ、柳戸キャンパスで英語をはじめとする外国語のコミュニケーション能力を研鑽する機会と、実際に海外で学習する機会を可能な限り与える。外国人留学生に対しては、日本事情に通じる学習機会を与える。そして留学生が日常生活と修学で困難に陥らない環境を作り、日本人学生と一緒に学習し、岐阜地域の住民や企業等と交流する機会を設ける。卒業及び修了後は、本学で体得した専門的知識や国際性を生かし、県内を中心とした地域や母国の発展に貢献することを期待する。

岐阜大学は、この国際化の policy を達成するために海外拠点を整備する。活発に学術交流を行っている協定大学等を選んで本学の国際化の拠点とし、場的・人的に相互交流を深化させ教育・研究をともに進める。特に協力を求める開発途上国等の機関と連携して絆を強化する。

国際化 vision

「5年後の岐阜大学」

- 岐阜大学が、全学として「国際化 policy」の内容を理解している。
- 岐阜大学が、組織的な支援体制のもとに、他国にまたがる教育と研究及び交流活動を進めている。
- 岐阜大学が、地元・地域の行う国際交流活動へ、参加と支援を積極的に行っている。
- 岐阜大学が、海外拠点を整備して、国際的な交流事業を展開している。
- 岐阜大学が、開発途上国など、互いに連携を要する海外の学術機関と密接に協力している。
- 在学生在が、留学に関する各種の支援を受けて、海外で学びやすい環境で修学している。
- 在学生在が、語学や文化の理解のもとに、国際化に関係するコミュニケーション能力を高めている。
- 在学生在が、気概とやりがいを持って、留学に挑戦している。
- 外国人留学生が、組織的な支援体制のもとに、安心して勉学し先進知識を旺盛に吸収している。
- 外国人留学生が、本学で学んだ専門性と国際性を生かして、地域や母国の発展に貢献している。
- 外国人留学生が、卒業・修了後も、自ら本学の教育研究活動に協力している。

2. 岐阜大学の国際化推進体制

岐阜大学グローバル推進本部は、「岐阜大学の国際化 policy と vision (2013年11月21日制定)」に基づき、国際化に繋がる施策を推進するとともに、その成果を地域に還元し、地域社会のグローバル（グローバル＋ローカル）化に貢献するために、2015年4月1日に設置された。2019年4月1日には、教員と事務職員が協働し、地域に根ざした国際化と成果の地域還元を推進するため、「岐阜大学グローバル推進本部」を「岐阜大学グローバル推進機構」に改組した。

岐阜大学グローバル推進機構においては、グローバル推進機構長のもとに、国際協働教育推進部門、地域国際化推進部門、留学推進部門、国際企画部門の4部門を設置し、全学的な組織として各部局との連携により岐阜大学のさらなる国際化を目指している。



図1 グローカル推進機構ホームページ（左）と HP へのリンク（QR コード：右）



図2 THE 世界大学ランキング日本版掲載：冊子（左）と YouTube チャンネル（右）

各部門の活動報告

令和2年度国際協働教育推進部門活動報告

部門長 上野 義仁
(応用生物科学部 教授)

1. 活動内容及び成果

本部門では、グローバルな視点を持つ学生を育成するため、同時に国際協働教育プログラムを担う教職員の国際性を高めるため、ジョイント・ディグリー（JD）やダブル・ディグリー（DD）などの国際性が高い学位プログラムを実施している。令和2年度は、修士課程 JD プログラムでは実際に修了生を送り出す年、博士課程の学生についても中間年という非常に重要な時期であった。新型コロナウイルス感染症の影響から、予定していたインド工科大学グワハティ校（IITG）及びマレーシア国民大学（UKM）からの本学への学生受け入れは延期となったが、オンラインによる遠隔指導により、岐阜大学と IITG 又は UKM の両大学の教育を受けることができる体制を継続した。2021年3月25日には、JD 第一期生である国際連携食品科学技術専攻（修士課程）の本学側入学者4名の学生が修了し、同日開催された学位伝達式には、本学関係者のほか、協定校である IITG からも、オンラインにより多くの関係者が出席した。

また、令和元年度に続き、12月8日・9日の二日間にわたり、「ポストコロナ時代のジョイント・ディグリー～教育研究の国際化と地方創生～」と題した国際シンポジウムを、Zoom Webinar にて開催した。シンポジウムはメインシンポジウム、学術セッション及び産官学金連携セッションから成り、本学関係者のほか、東海国立大学機構、名古屋大学、文部科学省、国内外の研究者、企業関係者及び行政、大学関係者など多くの参加者があり、JD プログラムを様々な角度から取り上げた大変有意義なシンポジウムとなった。また、新しい取り組みとしてアルバータ大学オンライントレーニングプログラム（教員・職員に対する英語研究プログラム）を実施した。



2. 課題及び次年度の取組方針

令和2年度においても、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえつつ、引き続き JD の教育を推進する。また、令和元年度から開催している国際シンポジウムを継続して開催し、大学の国際化を推進する。さらに、全国大学ジョイント・ディグリープログラム協議会（仮称）の設置に向けた準備をし、国際協働教育を推進する。

令和2年度地域国際化推進部門活動報告

部門長 小山 博之
(応用生物科学部 教授)

1. 活動内容及び成果

令和2年度はコロナ禍の中でスタートを切り、地域国際化推進部門の活動にとっては一つの転機となる年であった。ジョイント・ディグリー活動を中軸として、特定の産業や国際的な地域間の交流活動を通じて、地域の国際化推進の支援を目指す部門にとっては、対面や訪問活動が制限されることは当初制約となっていた。会議、講義などの様々なコンポーネントを遠隔に切り替える中で、従来の制約を超える利点を見出しながら進め、活動方法自体を見直す契機になった年ともいえる。

遠隔（Zoom Webinar 使用）で実施した岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム（2020年12月8日～9日）では、「ポストコロナ時代のジョイント・ディグリー」と題したメインシンポジウム、学術セッション「International (Japan, India, Malaysia) Webinar for Sustainable Development 2020」、産官学金連携セッション「国際連携 JD を基軸とする地方創生（東海・北東インド・マレーシア）」を実施し、企業・自治体等からの参加も含め、300名以上の参加を得ることができた。それぞれのセッションは、東京から文部科学省（伯井美徳高等教育局長）による講演、インド、マレーシアおよび国内大学からの講演、国内の企業、自治体等からの話題提供など、対面での会議形式を超える多様性を持つ会として実施することができた。同様に、年度中盤から遠隔形式で実施した「グローバル化のためのSDGs勉強会」では、一般財団法人バイオインダストリー協会からの講演などを含め、地域企業を含む学内外の関係者と共に学ぶ機会を共有している。この2つの活動は、学位プログラムなどの連携実施で培った大学間の連携により、それぞれの地域の産官学金をつなぐことによるグローバル化の推進を目指すもので、岐阜大学独自のモデルとして浸透しつつある。また、現状ではSDGsへの取り組みはすべての機関が必要としているが、「グローバル化」のためにSDGsを活かすとして視点・方向性を定めたことにより、地域の課題を具体的にとらえながら理解を深めることにつなげることができた。

また、同部門が所掌する「愛岐留学生就職支援プログラム」では、愛知県と岐阜県の産官学金が連携して留学生の地域への就職機会の提供と、それによる企業の国際化・人材獲得機会の向上を目指している。この活動でも、遠隔によるビジネス日本語の講義提供、オンラインでの企業合同説明会などが実施された。岐阜県内では、本学、岐阜県、岐阜県経営者協会及びジェトロ岐阜が連携して取り組んでいるが、対面実施した岐阜地区ワークショップや、プログラム修了者と現役学生との懇談会の遠隔形式での実施などでは、近隣大学への波及効果も見られている。県内機関が連携して継続することによる成果が期待できる段階になったと考えられる。



2. 課題及び次年度の取組方針

令和3年度も、ジョイント・ディグリーシンポジウムとSDGs勉強会を連動させることで、地域国際化を進めることが期待される。

令和2年度留学推進部門活動報告

部門長 嶋 睦宏
(工学部 教授)

1. 活動内容及び成果

令和2年度は新型コロナウイルス感染症による影響が多方面に及び、国際交流を通じた学生の留学も例外ではなかった。例年実施しているサマースクール派遣プログラムやサマースクール受入プログラムが中止となる中、影響が少ないオンライン形式による様々な国際交流の取り組みが模索された。具体的には、アルバータ大学 ESL プログラム及びグリフィス大学 ESL プログラムを、2021年2月～3月にかけて2～3週間の期間実施し、アルバータ大学5名、グリフィス大学9名、計14名が参加した。また、サマースクール受入プログラムについても令和3年度夏季でのオンライン開催に向けて、日本語授業や文化をオンラインで紹介する内容で、岐阜や岐阜大学の魅力を海外協定校の学生に発信すべく準備を進めている。また本学に在学する外国人留学生の生活支援についても、特に国際交流会館などの住環境をはじめとする修学環境のさらなる整備などについて活発な意見交換を行った。

2. 課題及び次年度の取組方針

課題として、コロナ禍で学生の実質的な渡航を通じた交流が行えない中、オンラインプログラムの整備とともに、コロナ禍後の渡航再開へ向け、次年度も引き続き派遣プログラムと受入プログラムの更なる充実を目指したい。具体的には、より多様性が尊重される国際社会へ向けて次世代の育成が大学においても重要な使命となる中、国際語としての英語の語学学習にとどまらず、広く異文化への理解にも重点を置いたプログラムの提供へ向けてさらに努めていきたい。また外国人留学生の生活支援についても、更なる修学環境の整備に努める。



令和2年度国際企画部門活動報告

部門長 北野 信哉

(グローバル推進機構国際企画調整役)

1. 活動内容及び成果

本部門は、学術交流・協定支援、国際交流に関する IR、国際広報及びキャンパスの国際化支援を担当した。令和2年度は、10名の教員と5名の事務職員から構成され、部門長は事務職員である国際企画調整役、副部門長は松井特任助教、部門員には担当事項（年報、学術交流・協定、IR、広報誌、HP、キャンパス国際化）を決めて対応願うこととした。運営方法は、これまでと大きく変えず、機動力重視で、基本的には部門長、副部門長、国際総務室、留学支援室で構成する部門WG（月1回開催）を中心に活動し、必要に応じて担当部門員や全部門員への意見照会を行った。

部門WGで1年間定型的に取り上げた事項は、①学術交流・協定支援、②国際交流に関するIR（国際交流年報を含む）、③国際広報（ホームページ、NEWS LETTER、チラシ）、④卒業した留学生のネットワークづくり、⑤キャンパスの国際化支援（事務職員の英語力強化を含む）、⑥国際月間、⑦年度計画への対応である。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、特有の活動や形を変えて行った活動もあった。①については、国際郵便での協定書のやり取りが困難となり、電子媒体での協定更新を行ったものがあった。また、新型コロナウイルスの感染者数が多い国の協定大学に対しマスク送付の支援を行った。②については、例年どおり国際交流年報及び国際IRデータブックを刊行し、継続的なデータ収集とその活用を行った。③については、様々な取り組みを行った。まず、国際広報を戦略的に行うために日経BPコンサルティングに分析を依頼しその分析結果を踏まえストーリー性のあるブランデッド動画を作成した。また、令和元年度に開設したグローバル推進機構のホームページについても同社の調査・分析をもとに海外への留学のページを、留学を目指す日本人学生にわかりやすい構成にアップデートした。さらに、英語による一般向け、外国人留学生向け及び企業向けの3本の大学紹介動画を作成した。そのほか、「THE世界大学ランキング日本版 RANKING NAVI 2020」への記事掲載（冊子・HP。いずれも進研アド）なども行った。⑤については、令和元年度に引き続き50歳以下の全事務職員を対象にTOEIC Listening & Reading Testを実施した。令和2年度はオンラインテストで実施し、会話能力や作文能力を測るため希望者には新たにTOEIC Speaking & Writing Testsも受験可能とした。結果として、600点以上の職員が16%となり、目標である15%を上回った。さらに協定大学であるアルバート大学に依頼し、本学の職員が英語で大学の業務を遂行するための実践的な英語対応力を修得することを目的とした英会話研修をオンラインで実施し、ハイレベルなビジネス英語を学ぶ機会を提供することができた。⑥については、多くのイベントが新型コロナウイルス感染症の影響を受けたが、10月を国際月間として実施した。まず、例年の学長主催国際交流パーティに代え外国人留学生・研究者に向けた学長からのメッセージを動画配信した。また、Google Earth VRを使用した海外体験や協定大学の学生とのオンライン交流会などコロナ禍に対応した新たなイベントも開催した。

2. 課題及び次年度の取組方針

国際企画部門では、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けつつもそれに対応した形での様々な取り組みを行ってきた。そのような状況下にあっても国際広報やキャンパスの国際化支援は昨年度から推し進めてきた積み重ねもあり、これまでの以上の成果を挙げている。次年度もよりよい成果を挙げられるよう継続して取り組みを続けたい。また、④について、海外同窓会（中国同窓会、インドネシア同窓会）等卒業した留学生のネットワークづくりについてもオンラインを活用した同窓会などコロナ禍に対応したイベントが開催されている。今後は、留学生のネットワークを国際関連事業にどのようにつなげていくかが課題である。

学内の国際化をサポートする体制

【日本語・日本文化教育体制】（日本語・日本文化教育センター）

岐阜大学における日本語・日本文化教育は日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）が担っている。日文センターでは、対象学生によって異なる様々なコースやプログラムを提供しているが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大という事態により、従来とは異なるコース・プログラム運営となった。（詳細は『日本語・日本文化教育センター紀要2020』参照）

（1）日本語研修コース

岐阜大学に在籍する大学院生、研究生、交換留学生を対象とした1学期間のコースで、前期・後期に開講される。「集中コース」と「一般コース」があり、前者は、集中的に（週10～12コマ）日本語を学び、日本語の習得・向上を目指す。後者は、専門の研究が中心であるため、まとまった日本語学習の時間が取れない学生向けの、授業数が少ない（週1～6コマ）コースとなっている。さらに令和2年度から、「生活日本語コース」が設けられた。これは日本語を初めて学ぶ学生が日本語を親しむきっかけとなる授業を提供する、未習者のみを対象としたコースである（週4コマ）。そのため、生活日本語コースはゼロ初級のみ、集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベルのクラス、一般コースは初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級（D）の4レベルのクラスが提供されることとなった。学期開始前に学内公募が行われ、指導教員による申請によってコースが、そしてプレイスメントテストの結果によって当人のレベルに合ったクラスが決定される。

（2）日本語・日本文化研修コース

自国の大学で日本語・日本文化を専攻する文部科学省奨学金留学生と交換留学生を対象とした、毎年10月に始まる約1年間のコースである。日本語授業や全学対象の授業を受けることにより日本語能力を向上させ、日文センターより提供される多彩な文化科目の受講、地域への見学旅行等により、日本文化・社会について深い見識を養うことができる。コースの終わりには、担当教員の指導のもと、日本語・日本文化に関わる修了論文を完成させ、「留学生は“日本”をどう見たか」と題する会で研究発表を行った。（詳しくは「国際交流活動、4. 日本語・日本文化教育センター関連」（p.33）参照）

（3）日本社会文化プログラム

日文センターに所属する学術交流協定大学の交換留学生（日本語・日本文化学習を希望する日本語初級～中級レベルの学生）を対象としたプログラムである。「異文化理解」と「日本文化理解」の二つのステップで、日本の社会や文化に関する知識を身につけることを目的に、半年ないしは1年間の研修期間で実施する。日本語学習と共に、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供しており、「日本文化へのいざない」という科目では、本学客員教授で江戸千家宗家蓮華菴家元である川上閑雪宗匠による茶道の講義・実践が学べる。

（4）全学共通教育（日本語・日本事情クラス、人文科学系科目）

各学部 に在籍する留学生と交換留学生を対象とした、上級レベルの日本語と日本事情に関する科目（4科目）を開講している。また、人文科学科目（5科目）も開講しており、その中には留学生と日本人学生の合同授業もある。

（5）交流ラウンジ

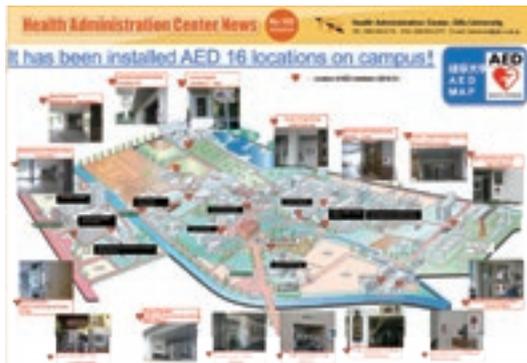
授業以外での日本語・日本文化教育の場として、日文センター内には「交流ラウンジ」が設置されている。留学生と日本人学生との交流、日本人学生チューターによる勉学・生活支援、パソコンの利用等、多様な活動ができる。不定期にイベントも開催されており、留学生と日本人学生双方にとって有意義な場所となっている。ただし、今年度はコロナ禍のためチューター活動及びイベントはすべて中止となった。

【保健管理体制】（保健管理センター）

保健管理センターでは、本学の外国人留学生及び研究者等の健康管理支援と、海外へ渡航する学生及び教職員の保健管理・準備支援にも力を入れている。

（１）外国人留学生・研究者に向けた保健管理センターニュース等による英語での広報活動

救命救急（AED）の案内



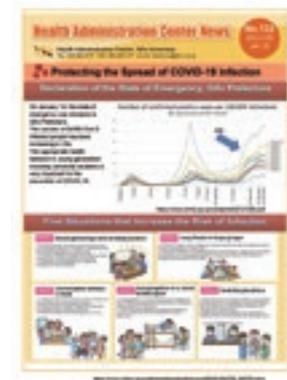
センターの利用案内



保健管理センターニュース英語版

《令和２年度発行実績》

No.	発行日	タイトル
—	2020.4.23	Map of Medical Institutions in the Gifu University Area
—	2020.4.23 2020.7. 8	Mental Counseling and Consultation (ONLINE)
131	2020.7.22	STOP! Heat Stroke
—	2020.9.24	Measures against the novel coronavirus infection at the Gifu University
—	2020.11. 6	Special Health Checkup in 2020
—	2020.12.11	Information of Annual Health Checkup in 2021
132	2021.1.25	Protecting the Spread of COVID-19 Infection



（２）外国人留学生・研究者来日時健康診断（胸部 X 線、感染症抗体検査含む）受診の徹底

外国人留学生・研究者には、来日後速やかに、本学新入生と同じ質の高い健康診断とその結果に基づく健康管理指導を提供している。特に、全員に麻疹、風疹、流行性耳下腺炎、水痘の抗体検査を実施し、抵抗力が不十分な者には追加予防接種の勧奨をしている。生来初めて健康診断を受けるという留学生もおり、英語で丁寧な結果説明を行っている。

（３）海外渡航に向けた「健康の手引き」を用いた渡航時の健康管理指導

海外へ渡航する学生及び教職員に向けて、海外渡航時に健康面で注意すべき事項をわかりやすくまとめたパンフレットを提供している。そして、渡航先に応じた予防接種などの渡航準備を個別支援している。（健康の手引き 2019年 4月 第三版：<http://www.hoken.gifu-u.ac.jp/img/tebiki.pdf>）

（４）「Health Management on Campus」の提供

外国人留学生・研究者全員に英語の健康啓発本を来日直後に提供し、自己健康管理、健康意識の向上を支援している。また、外国人留学生には、家族のことも含めた幅広い健康相談に対応している。

（５）外国人受け入れ教職員向け冊子「International Students(海外からの留学生)への健康管理の

手引き」(2020年 9月 第一版：http://www.hoken.gifu-u.ac.jp/img/tebiki_ryugakusei.pdf)の提供

教職員の資質向上のために、留学生の健康管理支援に必要な知識とスキル情報について詳述された冊子をホームページで公開すると同時に適宜、学内教職員に提供している。



3. 海外大学・機関等との学術・学生交流協定

本学では、組織的・計画的な研究者・学生の交流及び教育に関する情報交換等を推進するため、積極的に大学間学術交流協定を締結している。2021年3月31日現在、20ヵ国51大学1機関との大学間学術交流協定を締結しているほか、各部局においても様々な学術交流協定を締結している。

一覧はⅣ. 資料に掲載し、本年度に新規締結した協定大学等の詳細を以下に記載する。

本年度に新規締結した協定大学等

大学間

令和2年度に新規締結した学術交流協定大学等：3ヵ国3大学

①リール大学（フランス）

概要	リール大学は1562年設立と歴史が古く、パスツールが学部長を務めたこともある伝統的な名門大学である。1968年に大きな学問分野別に3つの大学に分立したが、2018年に再統合され、フランスで最大の大学となった。リール大学はこのアカデミックな歴史を生かすと同時に、きわめて活発に世界中の大学と交換留学や研究交流を通じた協力関係を築いている。		
目的	地域科学部国際教養コース学生の留学先として今後も需要が高く、また同大学からの留学生についても毎年コンスタントに希望者がいることから、今後も交流の需要が高いと考えられる。また、2018年に3つの大学が再統合されたことから、多分野にわたる包括的な交流も展望できる。このため、同大学と大学間協定を締結することは今後の岐阜大学の国際化にとって極めて有意義だと考えられる。		
協定発効日	2020.4.2	協定期間	5年間
年間交換留学可能学生数	4名		

②南フロリダ大学（米国）

概要	南フロリダ大学は1956年に設立された米国の州立大学である。141ヵ国から集まった約4,000人の留学生を含め、学生数は50,000人を超える。全米のトップ公立研究大学の一つでもあり、その質の高さはカーネギー財団に功績を認められている全国40施設のうちのひとつとして評価されている。またキャンパス内には癌センターや小児科病棟などがあり、医療研究にも注力している。その他、母国語を英語としない学生への英語教育機関（INTO）や、地域住民の生涯学習教育（Service Learning）等、228にも及ぶ学部及び大学院課程のコースが提供されている。		
目的	これまで本学医学科学生によるタンパ総合病院臨床研修や、南フロリダ大学医学部群衆衛生学科学学生による本学来訪といった交流を行っており、参加学生の満足度は、両大学ともに極めて高い。今回の大学間学術交流協定の締結に伴い、将来的には本学実施のサマースクールへの参加や、学部の垣根を越えた授業料相互不徴収による長期の学生派遣及び受け入れ等も検討している。		
協定発効日	2020.12.15	協定期間	5年間
年間交換留学可能学生数	—		



③ブラヴィジャヤ大学（インドネシア）

概要	ブラヴィジャヤ大学は、1963年に設立されたインドネシアの州立大学である。学生数は約60,000人で、インドネシアでは最大の州立大学である。また、2,000校ほどあるインドネシアの大学の中でも大変優秀であり、2021年の the Times Higher Education (THE) ランキングでは、インドネシア第3位となった。		
目的	ブラヴィジャヤ大学とは、2014年12月に工学部との間で部局間協定を締結して以来学生の交流を盛んに行ってきた。また先方リエゾンとも密に連絡を取っており、2019年には本学が開催した国際ジョイントミーティングにも参加した。今回大学間協定として締結したことにより、今後は工学部のみならず、幅広い分野での学生交流・教員交流が見込まれる。		
協定発効日	2021.2.23	協定期間	5年間
年間交換留学可能学生数	2名		

令和2年度に学術交流協定の更新を完了した大学

	協定大学名	国・地域	最新発効日	有効期間
1	ベンハー大学	エジプト	2020年3月18日	5年間
2	華僑大学	中国	2020年3月29日	5年間
3	カウナス工科大学	リトアニア	2020年4月1日	5年間
4	電子科技大学	中国	2020年6月16日	5年間
5	インド工科大学グワハティ校	インド	2020年6月23日	5年間
6	シドニー工科大学	オーストラリア	2020年7月21日	5年間
7	内モン古農業大学	中国	2020年8月8日	5年間
8	カンピーナス大学	ブラジル	2020年9月1日	5年間
9	ボゴール農科大学	インドネシア	2020年12月2日	5年間
10	同済大学	中国	2020年12月8日	5年間

令和2年度に大学間学術交流協定を終了した大学

	協定大学名	国・地域	締結日	終了日（年度）
1	ルンド大学	スウェーデン	1987年9月12日	2021年3月31日（2020）
2	西南交通大学※	中国	2008年9月5日	2020年3月31日（2019）
3	ウェストバージニア大学※	米国	1998年12月16日	2018年12月15日（2018）
4	シドニー大学※	オーストラリア	2012年12月5日	2017年12月31日（2017）
5	中国医科大学※	中国	1987年8月15日	2017年2月6日（2016）
6	ポートランド州立大学※	米国	2006年6月19日	2016年3月23日（2015）
7	コロラド州立大学※	米国	2010年8月13日	2013年11月19日（2013）

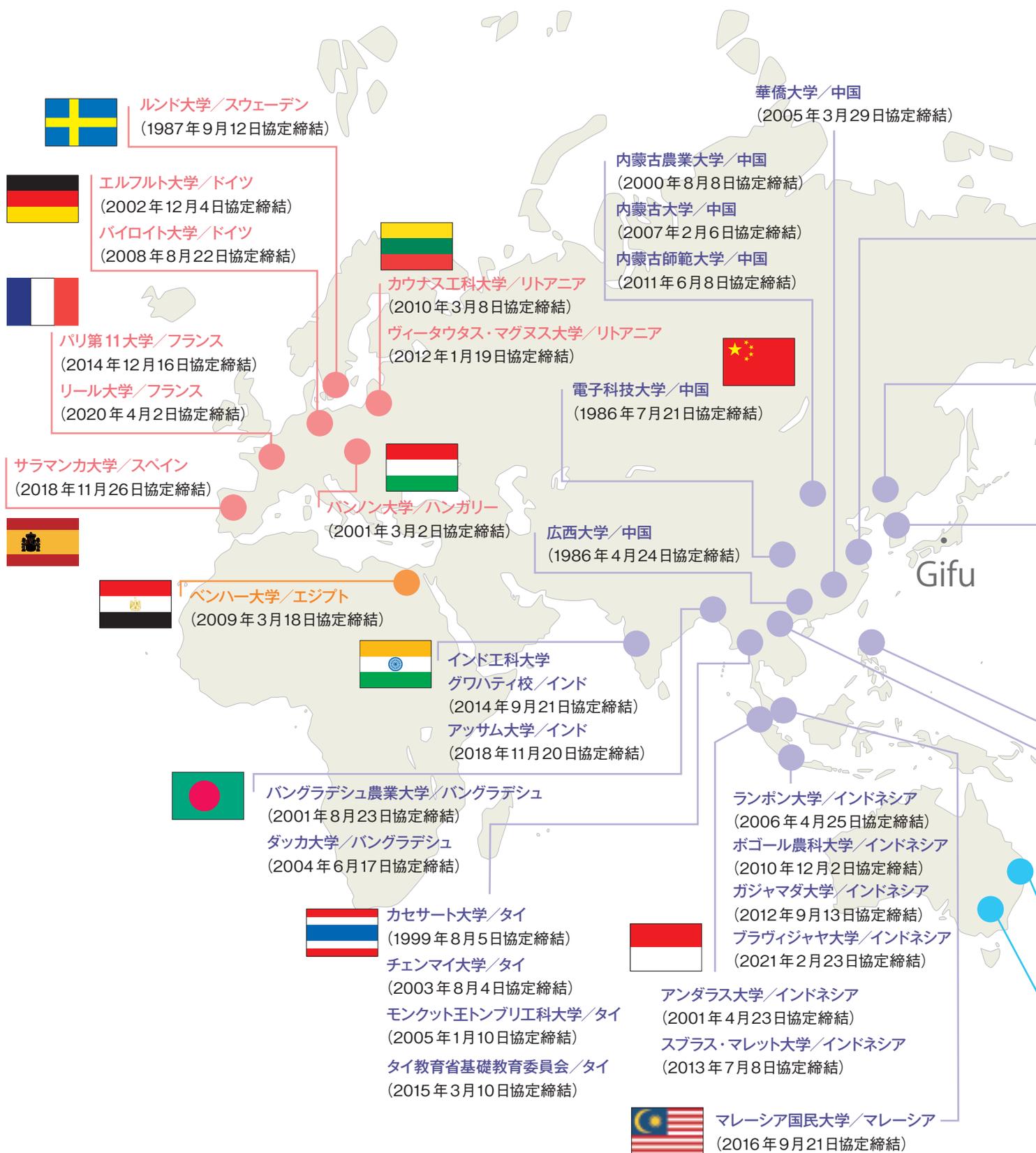
※令和元年度以前に協定を終了した大学のうち、年報未掲載分を本報にまとめて掲載した。

部局間

令和2年度に新規に締結した学術交流協定大学等

部局	締結先	国・地域	締結日
地域科学部	国立中央大学文学院	台湾	2021.1.14

大学間学術交流協定締結大学・機関マップ (2021年3月31日現在 20ヵ国51大学1機関)





部局間学術交流協定締結大学・機関マップ (2021年3月31日現在 27ヵ国1地域63学部)



表示アイコン	協定部局	表示アイコン	協定部局
教	教育学部	連創	連合創薬医療情報研究科
地	地域科学部	流	流域圏科学研究センター
医	医学部	保	保健管理センター
工	工学部	イ	インフラマネジメント技術研究センター
応	応用生物科学部	複	複合材料研究センター
連農	連合農学研究科	ス	地域連携スマート金型技術研究センター
連獣	連合獣医学研究科	基盤	科学研究基盤センター



- 教 山西師範大学 / 中国
- 医 浙江大学 医学院 / 中国
- 工 南京師範大学 エネルギー機械工学院 / 中国
- イ 中国科学院水利部 水土保持研究所 / 中国
- イ 中国水利水電科学研究院 岩土工程研究所 / 中国



- 医 忠北大学校 医学部 / 韓国
- 工 全南大学校 工学部 / 韓国
- 工 慶北大学校 工学部 / 韓国
- 工 忠南大学校 工学部 / 韓国
- 工 柳韓大学校 工学系列 / 韓国
- 応 国立獣医科学検疫院 獣医科学研究所 / 韓国
- 医 ソウル大学校 医科大学 / 韓国



- ス 台湾国立高雄科技大学 先端金型研究開発センター / 台湾
- 工 長庚大学 工学部 / 台湾
- 地 国立中央大学 文学院 / 台湾



- 医 シカゴ大学 医学部 / 米国
- 工 アメリカ国立衛生研究所
- 国立心肺血液研究所 / 米国
- 地 アーカンソー大学
- フォートスミス校 / 米国

● 医 ハワイ大学 医学部 / 米国

● 医保 南フロリダ大学 医学学群 / 米国



- 連農 チュイロイ大学 / ベトナム
- 連創 基盤 タイビン医科薬科大学 医・薬科学技術センター / ベトナム



● 応 南太平洋大学 自然科学・工学・環境学群 / フィジー



● 工 ブルネイ・ダルサラーム大学 理学部 / ブルネイ・ダルサラーム



● 工 ニューサウスウェールズ大学 / オーストラリア



● 工 東ティモール国立大学 工学部 / 東ティモール

外国人留学生在籍数

5月1日現在の岐阜大学の外国人留学生在籍者数は322名（総学生数7,326名の4.4%）で、前年5月1日現在の365名と比べ43名（11.8%）減少した。

出身国別に見た場合、上位3カ国は1位中国129名（40%、前年度-16名）、2位インドネシア64名（20%、前年度+8名）、3位ベトナム20名（6%、前年度-3名）であった。地域別に見た場合、91.9%がアジアからの学生であり、次いでアフリカ（5%）、ヨーロッパ（2.2%）、他（0.9%）という内訳となっている。

学部・研究科別内訳

部 局 等	学部		修士 専門職学位		博士		日 研 生	そ の 他	合 計
	正 規	非 正 規	正 規	非 正 規	正 規	非 正 規			
教育学部／教育学研究科（専門職学位・修士）	0	6	0	3					9
地域科学部／地域科学研究科（修士）	9	8	25	0					42
医学部（医学科・看護学科）／医学系研究科（修士／博士）	5	0	0	1	9	0			15
工学部／工学研究科（博士）	29	7			51	0			87
応用生物科学部	6	5							11
自然科学技術研究科（修士）			78	6					84
共同獣医学科（博士）					1	1			2
連合農学研究科（博士）					46	2			48
連合獣医学研究科（博士）					14	0			14
連合創薬医療情報研究科（博士）					1	0			1
教育推進・学生支援機構		0							0
流域圏科学研究センター					0	0			0
日本語・日本文化教育センター		3					6		9
ネットワーク大学コンソーシアム岐阜								0	0
合 計	49	29	103	10	122	3	6	0	322

連合大学院別内訳

研 究 科	正 規		非 正 規	
	学 生 数	内配置大学が 岐阜大学	学 生 数	内配置大学が 岐阜大学
共同獣医学科（博士）	1	1	1	1
連合農学研究科（博士）	46	35	2	2
連合獣医学研究科（博士）	14	4	0	0
連合創薬医療情報研究科（博士）	1	1	0	0
合 計	62	41	3	3

本学学生の海外派遣実績

本学学生の大学を通じた海外渡航実績は以下の通りである。なお、岐阜大学基金等の海外渡航における助成金においては、私事渡航に対しても申請があり採択された場合、支援を行っているが、令和2年度は世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、外務省の感染症危険レベルがレベル2以上（不要不急の渡航は止めてください。）のため、支援対象としていない。

表1 本学学生の海外渡航者数（プログラム別・延べ数）

種別		渡航者数	
全学	大学間学術交流協定に基づく交換留学	1	
	岐阜大学サマー スクールプログラム	サマースクール（派遣）*	0
		ESL プログラム	0
		EST プログラム	0
部局	教育学部	総合文化海外実習	0
		短期留学・研修	0
	地域科学部	部局間学術交流協定に基づく交換留学	0
	医学部	海外臨床実習	0
	工学部・ 自然科学技術研究科・ 工学研究科	工学系協定校学生交換留学プログラム（派遣）	0
		自然科学技術研究科／工学研究科グローバルリーダー養成のためのインストラクショナル・インターンシッププログラム	0
		国際学会発表奨学金プログラム	0
	応用生物科学部・ 自然科学技術研究科	遺伝資源の有効利活用を目指すグローバル職業人養成プログラム	0
		生物多様性と遺伝資源に係る南部アジア国際協働教育プログラム	0
		国際獣医学インターンシップ演習	0
	工学研究科	JD プログラム	0
	自然科学技術研究科	JD プログラム	0
		水環境リーダー育成プログラム	0
	連合農学研究科	JD プログラム	0
	連合獣医学研究科	海外派遣プログラム	0
		若手研究者育成プログラム	0
その他	トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム	3（3）	
	バロー・V ドラッグ	1（1）	
	4大学連携事業研修プログラム	0	
	日中友好中部六県大学生訪中団	0	
	研究留学	0	
	学会	0	
	調査	0	
	個人留学	2	
インターンシップ	0		
合計		7（4）	

* 令和2年度はオンラインで実施し、グリフィス大学（オーストラリア）へ9名、アルバータ大学（カナダ）へ5名の参加があった。

**（ ）は、該当のプログラムへ採択されたが、新型コロナウイルス感染症の拡大によりプログラムが実施されず、支援対象とならなかった人数を内数で示した。

表2 本学学生の海外渡航者数（部局別・延べ数）

部局	学部生数	大学院生数	全学部生数	全大学院生数
教育学部／教育学研究科（専門職学位・修士）	1	0	1045（+5）	153（+8）
地域科学部／地域科学研究科（修士）	2	0	461（-11）	31（-11）
医学部（医学科・看護学科）／医学系研究科（修士・博士）	0	0	988（-9）	221（+16）
工学部／工学研究科（博士）	0	2	2270（+2）	108（-12）
応用生物科学部	1	—	898（+2）	—
自然科学技術研究科（修士）	—	1	—	900（-47）
共同獣医学科（博士）	—	0	—	9（+4）
連合農学研究科（博士）	—	0	—	96（-3）
連合獣医学研究科（博士）	—	0	—	51（-29）
連合創薬医療情報研究科（博士）	—	0	—	26（+2）

全学部生数・全大学院生数は2020年岐阜大学概要の数値を使用

（ ）内は前年度からの増減を示す



トビタテ！留学JAPANとは？

文部科学省は、意欲と能力のある全ての日本の若者が、海外留学に自ら一步を踏み出す気運を醸成することを目的として、平成25年10月より留学促進キャンペーン「トビタテ！留学JAPAN」を開始しました。本学の学生も数多く、世界に旅立っています。

トビタテ！岐阜大生！！

本学の採用実績は次の通りです。

平成26年度	2014年9月－2015年3月	メルボルン大学	オーストラリア
	2014年12月－2015年9月	メルボルン大学	オーストラリア
	2014年9月－2016年9月	ランガラカレッジ	カナダ
平成27年度	2015年9月－2016年3月	ベルリン自由大学	ドイツ
平成28年度	2016年10月－2017年9月	ワーゲニンゲン大学、ルーヴァンカトリック大学	オランダ、ベルギー
	2016年10月－2017年9月	チュレーン大学	米国
	2016年10月－2017年9月	国立衛生研究所	米国
	2016年10月－2017年3月	シンガポール国立大学	シンガポール
平成29年度	2017年9月－2018年8月	アルバータ大学	カナダ
	2017年11月－2018年9月	デュポン小児病院	米国
平成30年度	2018年4月－2019年6月	シドニー大学	オーストラリア
	2018年9月－2018年10月	ミネソタ大学ツインシティー校	米国
	2018年9月－2019年6月	イエナプラン教育協会、ヨーク大学附属語学学校、Eric Hamber Secondary School	オランダ、カナダ
	2018年9月－2019年9月	スイス連邦工科大学ローザンヌ校	スイス
	2018年10月－2019年9月	国立衛生研究所	米国
令和元年度	2019年9月－2020年9月	スウェーデン王立工科大学	スウェーデン
	2020年4月－2020年12月※	フエ大学、農場フィールドワーク、ヘルシンキ大学等	ベトナム、フランス、フィンランド
	2020年4月－2021年3月※	ロイヤルメルボルン工科大学	オーストラリア
	2020年9月－2021年8月※	アイオワ州立大学	米国
	2020年9月－2021年8月※	ネバダ大学リノ校	米国
	2020年4月－2021年3月※	国立衛生研究所	米国
2020年4月－2020年5月※	国立神経学脳神経外科学病院	イギリス	

※新型コロナウイルス感染症の影響により渡航時期未定



本学教職員派遣実績 (令和2年度海外渡航者数調べ(延べ人数))

部局名	出張	研修	合計
教育学部・教育研究科	0(0)	0(0)	0(0)
地域科学部・地域科学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
医学部・医学系研究科	0(0)	0(0)	0(0)
医学部附属病院	0(0)	0(0)	0(0)
工学部・工学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
応用生物科学部	0(0)	0(0)	0(0)
自然科学技術研究科	0(0)	0(0)	0(0)
共同獣医学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
連合農学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
連合獣医学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
連合創薬医療情報研究科	0(0)	0(0)	0(0)
学術研究・産学官連携統括本部	0(0)	0(0)	0(0)
高等研究院	0(0)	0(0)	0(0)
糖鎖生命コア研究所	0(0)	0(0)	0(0)
流域圏科学研究センター	0(0)	0(0)	0(0)
地域協学センター	0(0)	0(0)	0(0)
教育推進・学生支援機構	0(0)	0(0)	0(0)
保健管理センター	0(0)	0(0)	0(0)
岐阜大学運営局	0(0)	0(0)	0(0)
グローバル推進機構*	0(0)	0(0)	0(0)
合計	0(0)	0(0)	0(0)

うち()内は大学間・部局間学術交流協定大学

* 令和2年度は、大学間学術交流協定大学であるアルバータ大学(カナダ)のオンライン研修を開催した。教員向け研修に15名、事務職員向け研修に9名が参加した。

外国人研究者・来訪者受入実績 (令和2年度外国人研究者・来訪者受入数調べ(延べ人数))

部局名	研究者	来訪者	国(研究者)	国(来訪者)	合計
教育学部・教育学研究科	0(0)	0(0)			0(0)
地域科学部・地域科学研究科	0(0)	0(0)			0(0)
医学部・医学系研究科	0(0)	0(0)			0(0)
医学部附属病院	0(0)	0(0)			0(0)
工学部・工学研究科	2(0)	0(0)	中国、インドネシア		2(0)
応用生物科学部	2(0)	0(0)	中国、エジプト		2(0)
自然科学技術研究科	0(0)	0(0)			0(0)
共同獣医学研究科	0(0)	0(0)			0(0)
連合農学研究科	0(0)	0(0)			0(0)
連合獣医学研究科	0(0)	0(0)			0(0)
連合創薬医療情報研究科	0(0)	0(0)			0(0)
学術研究・産学官連携統括本部	0(0)	0(0)			0(0)
高等研究院	0(0)	0(0)			0(0)
糖鎖生命コア研究所	0(0)	1(1)		フランス	1(1)
流域圏科学研究センター	2(0)	0(0)	中国		2(0)
地域協学センター	0(0)	0(0)			0(0)
教育推進・学生支援機構	0(0)	0(0)			0(0)
保健管理センター	0(0)	0(0)			0(0)
岐阜大学運営局	0(0)	0(0)			0(0)
グローバル推進機構	0(0)	3(0)		韓国、フランス	3(0)
合計	6(0)	4(1)			10(1)

うち()内は大学間・部局間学術交流協定大学

国際協力活動（JICA 事業）

本学の理念である「学び、究め、貢献する」に基づき、グローバルな視点においても社会貢献、また有為な人材育成を行うため、積極的な国際協力活動を行っている。これまで本学が行ってきた国際協力機構（JICA）による専門家派遣、外国人研修員受入れ及び学位課程就学者受入れ等について、今後も引き続き協力をを行うと同時に、海外の大学及び関係機関等と国際的なネットワークを構築し、教育研究の国際化を図ることで、世界に開かれた大学を目指す。

本年度に実施された国際開発協力一覧（JICA 事業）

種別	部局	国名	プロジェクト名	人数	協力期間
学位課程就学者受入	自然科学技術研究科	モンゴル	道路アセットマネジメントコース	1名	2019.4.1-2021.3.31
	工学研究科	ケニア	道路アセットマネジメントコース	1名	2020.4.1-2023.3.31
	自然科学技術研究科	ブータン	道路アセットマネジメントコース	1名	2020.4.1-2022.3.31
	工学研究科	東ティモール	科学技術イノベーション人材育成	1名	2020.10.1-2023.9.30

JICA 東ティモール事業

『東ティモールでは1999年8月の独立を問う直接投票後の混乱により、多くの住民が避難を余儀なくされ、教育機関を含む物的インフラの7割以上が破壊・使用不可能となるなど甚大な被害を被った。東ティモール暫定行政統治機構（UNTAET/ETTA）は2000年11月に東ティモール大学を開校。国造りを担うべき技術系人材の育成の観点から、インドネシア時代の旧東ティモール・ポリテクニクを母体として工学部に電気／電子工学科、機械工学科、土木工学科を設置したが、東ティモールでは高等技術教育体制の整備・運営に係る経験・知識が不足しており、日本に支援を要請してきた。

日本としては、東ティモールの支援要請に応え、2001年より東ティモール大学工学部各学科のカリキュラムの策定、緊急無償資金協力による施設復旧・機材供与、電気・電子工学科に対して実習指導の専門家派遣を行ってきたところである。』¹⁾

本学は2003年から JICA 東ティモール事業「JICA 東ティモール大学工学部支援プロジェクト」、さらに2010年からは第2フェーズである「東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト」²⁾の協力機関として、同国を支援している。

- 1) 東ティモール大学工学部支援プロジェクト：JICA HP 参照
(<http://www.jica.go.jp/project/easttimor/0601585/01/index.html>)
- 2) 東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト：JICA HP 参照
(<http://www.jica.go.jp/project/easttimor/002/outline/index.html>)

短期研修プログラム

【サマースクール（夏期短期語学研修：派遣）】

サマースクールは、その国の言語や文化を集中的に勉強するプログラムであり、短期間海外で生活することで国際感覚を高め、言語力を向上させ、今後の国際交流・海外留学等への契機となることを目的に実施している。令和2年度については、新型コロナウイルス感染症の影響により、すべてのサマースクールプログラムを中止したが、次年度のサマースクールを見据えて、令和2年度春休みに、協定大学であるグリフィス大学（オーストラリア）およびアルバータ大学（カナダ）とのオンライン留学を開催した。

大学名	グリフィス大学（オーストラリア）
プログラム名	Direct Entry Program Online (DEPO)
プログラム実施期間	2021年2月22日～3月12日
内容	英語研修（オンライン）
参加人数	9名（オンライン）

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	Communication Skills for Global Citizenship Online (CSGCO)
プログラム実施期間	2021年3月1日～3月12日
内容	英語研修（オンライン）
参加人数	5名（オンライン）

【サマースクール（夏期短期語学研修：受入）】

令和2年度の岐阜大学サマースクール（受入）は、例年通り6月末から7月末までの期間での開催を予定し、対象協定大学へポスターによる周知を開始していたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い3月18日に開催した留学推進部門短期受入チーム会議にて、「協定大学より来日する参加者および本学関係者の健康と安全を鑑み中止」とした。

第33回目となる予定であった令和2年度のサマースクール（受入）では、対象協定大学の拡大を狙い、日本語能力を「日本語能力試験（JLPT）N4～N3」から「初級レベル～JLPT N3」とし、日本語未修者でも参加可能なコンテンツの提供を予定していた。また、参加者の利便性を向上させるため宿泊先を「学外合宿研修所（長良竜東町）」から大学に隣接した民間宿舎（ルームシェア型）へ変更することも検討していた。



【Collaborative Video Making Program (ウインタースクール・スプリングスクール)】

令和2年度は、例年実施していたウインタースクール及びスプリングスクールの代替として、ジョイント・ディグリープログラムの相手大学であるインド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学及び本大学の3大学の学生が参加するオンライン交流事業 Collaborative Video Making Program を実施した。

このプログラムでは、3大学の学生が4グループに分かれ、国際交流に関わる動画の共同制作を行った。各グループは、オーストラリアの creative agency のプロデューサーからスマートフォンでの動画撮影技術の指導を受けながら、ポストコロナ時代に向けた国際交流の促進をテーマに、各大学での学生生活の魅力を一つのストーリーにまとめた。

このプログラムの Final Competition を、2021年3月9日に Zoom Webinar で開催した。Final Competition では、学生が制作した動画作品の発表を行い、特別審査員が講評を行った。最後には、特別審査員による採点及び視聴者投票が行われ、グループ4の作品「Happiness is our choice」が最優秀作品に決定した。

本プログラムで制作された動画作品は、GU-GLOCAL Channel から視聴できる。



対象大学	インド工科大学グワハティ校 (IITG)、マレーシア国民大学 (UKM)
実施期間	11月13日～2021年3月9日
参加人数	16名：岐阜大学8名、IITG4名、UKM4名
特別審査員	Dr. Hisataka Moriwaki, President of Gifu University Dr. Yoshihiko Uematsu, Executive Director of GU-GLOCAL Dr. Mihir Kumar Purkait, Dean of Alumni & External Relations of IITG Prof. Dato' Dr. Imran Ho Abdullah, Deputy Vice-Chancellor of Industry, Alumni & Community Partnerships of UKM Mr. Yasuo Taniguchi, CEO of Long Term Industrial Development Co.Ltd

[成果報告]

Collaborative Video Making Program Web site

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/videomaking/>

GU-GLOCAL Channel

<https://www.youtube.com/channel/UCMJkzg04fsxzo3ogeNHC-PA>

4. 国際交流活動

1. 国際協働教育・地域国際化関連

6月24日 第1回 English Circle of Friends

対面

English Circle of Friends (EC) は、学生や教職員が英会話を楽しむことができるイベントであり、令和2年度第1回 EC は3名の岐阜県国際交流員を招いて開催した。参加者はグループに分かれ、「Let's get to know each other」をテーマに自身の興味や経験等について紹介し合った。EC は計7回開催され、延べ142人が参加した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000377.html>



8月12日 岐阜南ライオンズクラブから留学生へ支援金寄贈

対面

新型コロナウイルス感染症の影響により生活が困窮した10名の留学生に、岐阜南ライオンズクラブから一人5万円の支援金が寄贈された。留学生からは、生活費や学費の支払いに充てられると、感謝の意が述べられた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000392.html>



9月22日～23日 マレーシア国民大学とのシンポジウム共催

オンライン

マレーシア国民大学と共同で、食品科学におけるシンポジウム「UKM-GIFU University International Symposium on Food Sciences」を2日間にわたり開催した。両大学の教員・学生45名が参加し、活発な質疑応答が交わされる研究交流となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000403.html>

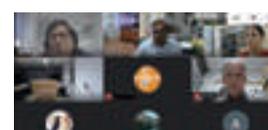


10月16日 インド工科大学グワハティ校とのウェビナー共催

オンライン

インド工科大学グワハティ校と合同で、「Recent Advances in Translational Research in Food Science and Technology」と題したウェビナーが産学交流の促進を目的に企画され、世界食糧デーに合わせて開催された。約390名が参加を登録する中、食品科学技術における学術的及び応用的な最新動向が紹介された。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000408.html>



10月26日～30日 アルバータ大学ビジネス英会話研修

オンライン

アルバータ大学（カナダ）が実施する事務職員向け英語研修を、9名の事務職員が受講した。受講者は、業務を遂行する上で必要となる実践的な英文メールの書き方や、窓口での留学生や外国人研究者への対応の仕方を学んだ。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/docs/newsletter50jp.pdf>



11月27日 Collaborative Video Making Program 初回ミーティング

オンライン

本学、インド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学の3大学による学生交流事業「Collaborative Video Making Program」の初回ミーティングが開催された。参加学生16名は4チームに分かれ、約3か月間にわたり、ストーリー構成や撮影を各国で連携して取り組み、国際交流をテーマとした動画作品を制作した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000421.html>

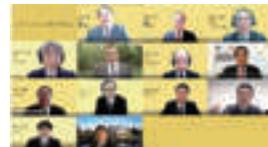


12月8日～9日 岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2020

オンライン

「ポストコロナ時代のジョイント・ディグリー ～教育研究の国際化と地方創生～」と題し、第2回目となる国際シンポジウムを開催した。メインシンポジウム・学術セッション・産官学金連携セッションの3部で構成され、本学、東海国立大学機構、名古屋大学、文部科学省、国内外の研究者、企業、行政及び大学関係者、延べ325名が参加した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/000422.html>



2021年2月10日 「University Leadership in Challenging Times — And the Way Forward —」に本学教員登壇

オンライン

マレーシア国民大学、マレーシア高等教育省及びマレーシア高等教育リーダーシップアカデミーが開催した会議に、リム・リーワ教授が参加した。リーワ教授は、本学が実施するオンラインと対面のハイブリッド型教育について報告し、評価を得た。会議では、ポストコロナ時代における高等教育機関の国際化や留学生の獲得、教育の質の保証や大学の目指すべき姿等について意見が交わされた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000439.html>



2021年3月5日 若手・中堅研究者海外研修プログラム報告会

オンライン

若手・中堅研究者を対象とした海外研究機関との共同研究助成事業を、平成27年度から実施している。令和2年度に助成を受けた本学教員8名による共同研究成果について、研究報告会が開催され23名が参加した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000433.html>



2021年3月5日 東京大学主催 第3回 JIEPP シンポジウムに本学教員登壇

オンライン

「産学連携のグローバル展開 ～日印交流の重要性～」と題したシンポジウムに地域国際化推進部門長の小山博之教授が登壇し、本学がインド工科大学グワハティ校と共同で実施するジョイント・ディグリープログラム及び本プログラムを軸に北東インド地域と産学官金が連携する日印交流について発表した。シンポジウムでは、約115名が参加する中、日印間の経済的及び学術的発展の可能性について議論された。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/000447.html>

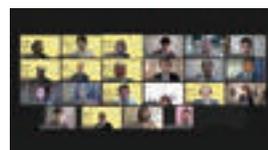


2021年3月9日 Collaborative Video Making Program Final Competition

オンライン

本学、インド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学の参加学生が共同で制作した動画作品の審査会を開催した。ウェビナー形式で開催された審査会では、延べ55名が視聴し、3大学及び企業からの来賓による採点と視聴者投票が行われた。投票の結果、グループ4の作品「Happiness is our choice」が最優秀作品に選出された。4作品はグローバル推進機構のYouTubeチャンネルで留学希望者向けの広報動画として公開された。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000449.html>





2021年3月12日 横浜国立大学主催 第4回日印産官学連携 人材育成セミナー
に本学教員登壇

オンライン

日本の経済成長と、持続可能な世界への転換に寄与できるインドの高度人材育成の促進を目的に開催されたセミナーに、国際協働教育推進部門長の上野義仁教授が登壇した。上野教授は、本学がインド工科大学グワハティ校と協働で実施するジョイント・ディグリープログラムについて、部局横断型で提供する派遣・受入プログラム並びに研究者交流の成果と今後の展開について発表した。

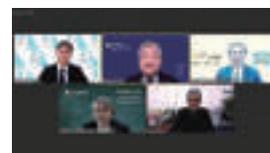


参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000448.html>

2021年3月18日 慶応義塾大学主催 世界展開力強化事業 プラットフォーム構築事業シンポジウムに本学教員登壇

オンライン

「共同学位プログラム協議会設立に向けて」と題したシンポジウムの第一部にグローバル推進機構長の植松美彦教授が登壇した。本学が実施するジョイント・ディグリープログラム及び教育・研究・産官学金連携のねらいと成果について説明した。パネルディスカッションでは、運用の課題等を共有すると共に、共同学位プログラムの今後の展望について議論が交わされた。



参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000452.html>

2021年3月25日 ジョイント・ディグリープログラム第1期生（修士課程）
学位記伝達式

ハイブリッド

自然科学技術研究科が設置する岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻（修士課程）の学位記授与式が挙行された。実地とオンラインのハイブリッド形式で執り行われた伝達式では、両大学の関係者が列席する中、本プログラム初の修了生となる4名の本学学生に共同学位記が授与された。

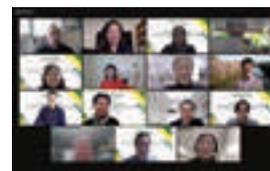


参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000456.html>

2021年3月8日～30日 アルバータ大学（カナダ）による教員向け短期研修

オンライン

アルバータ大学提供の「英語による授業の実践」研修が14日間にわたり開催され、15名の教育教員が英語による授業実践序論及び高等教育機関のための授業設計について受講した。本研修は、国際協働教育を实践する上で必要となる、英語による授業の充実に向けて国際協働教育推進部門により導入された。



参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000462.html>

2021年3月26日 グローカル化のためのSDGs勉強会（第5回）

オンライン

地域のグローバル化の推進を目的に、本学が有する人的ネットワークを活用した「グローバル化のためのSDGs勉強会」がウェビナー形式で計5回実施され、延べ214名が参加した。第5回は、国立遺伝学研究所 櫻井望 特任准教授を講師に迎え、「食品成分の網羅解析（高付加価値化ツール）」をテーマに開催された。



参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/000458.html>

2. 留学推進・国際企画関連

4月15日 広西大学（中国）からマスクの寄贈

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い国内でのマスク不足が深刻化する中、海外協定大学の広西大学から医療用マスク2,000枚が寄贈された。寄贈された医療用マスクは、医学部附属病院を中心に本学保育園等にも配布され、協定大学からの温かい支援に感謝しつつ使用された。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000361.html>



5月19日 駐名古屋中華人民共和国総領事館からマスクの寄贈

駐名古屋中華人民共和国総領事館から、医療用マスク250枚及びウェットティッシュ400枚が寄贈された。寄贈された医療用マスク及びウェットティッシュは医学部附属病院に配布され、新型コロナウイルス感染防止に役立てられた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000369.html>



8月26日 アッサム大学（インド）とノーザンケンタッキー大学（米国）へマスクを寄贈

新型コロナウイルス感染症の拡大が深刻化している地域の協定大学に向けてマスクの支援を募り、支援を必要としたアッサム大学及びノーザンケンタッキー大学に対し、友好の意を込め各2,000枚のマスクを寄贈した。両大学からは、支援への感謝の意が伝えられた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/docs/newsletter49jp.pdf>



10月7日 （国際月間） Google Earth VR（仮想現実）で海外を体験

対面

国際月間のイベントとして、Google Earth VR を利用した協定大学のキャンパスツアーを開催した。アルバータ大学（カナダ）やグリフィス大学（オーストラリア）を舞台に、本学教員や ESL プログラム参加学生の案内の下、バーチャルツアーを実施し、延べ15名が参加した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000406.html>



10月9日～29日 （国際月間） 国際広報展

対面

国際月間のイベントとして、本学の自然や国際交流活動をテーマとした写真展を開催した。本展には、松尾清一機構長や森脇久隆学長をはじめ、学内外から多くの来訪があり、本学の国際交流への理解を深める機会となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000413.html>

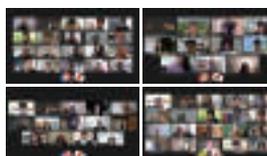


10月14日～29日 （国際月間） 海外協定大学の学生とのオンライン交流会

オンライン

国際月間のイベントとして、アルバータ大学（カナダ）、ノーザンケンタッキー大学（米国）、リール大学（フランス）及びヴィータタス・マグヌス大学（リトアニア）の学生と、本学学生とのオンライン交流会が計7回開催された。本学から計92名、相手大学から計82名の応募があり、先着順で選ばれた学生は自身の学生生活や食文化等、様々な話題を介して交流を深めた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000410.html>

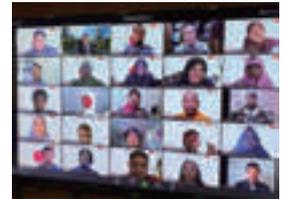




10月29日 インドネシア同窓会主催 Graduation and Welcome Party

オンライン

岐阜大学インドネシア同窓会委員会は、インドネシアからの留学生13名の卒業を祝福し、同窓会への参加を歓迎するパーティーを開催した。本学からは森脇久隆学長をはじめとする6名の教職員が参加した。会は終始和やかな雰囲気が進み、最後に本同窓会の更なる発展と、本学とより強い繋がりを築いていくことが確認された。
参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000412.html>



12月11日 「リトアニアと杉原千畝」 オンライン講演会

ハイブリッド

シャウレイ大学（リトアニア）のシモナス・ストレルツォーバス歴史学部准教授による講演会を、「リトアニア・難民・杉原千畝」をテーマに開催した。聴講者は、大戦時の欧州の歴史への理解を深めると共に、杉原氏の行った人道支援に改めて深い感銘を受けた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000419.html>



12月12日 リトアニア勉強会 in 八百津 ～岐阜大学生のリトアニア留学体験記～

ハイブリッド

海外協定大学ヴィータウタス・マグヌス大学（リトアニア）に留学した学生による留学報告会を開催した。同大学の学生もオンラインで参加し、同国やキャンパスの様子を紹介した。また、リトアニアの文化等についての会場からの質問にも対応し、活気ある交流の場となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000424.html>



12月18日・23日 オンライン留学説明会

対面／録画公開

海外協定大学のグリフィス大学（オーストラリア）及びアルバータ大学（カナダ）が提供するオンライン留学の説明会が開催された。説明会では、新型コロナウイルス感染症流行下における新しい留学方法を模索する学生達が熱心に傾聴した。説明会の収録映像は、後日グローバル推進機構のYouTubeチャンネルでも公開された。
参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000426.html>



12月22日 ジュール・イルマン在京都フランス総領事学長表敬訪問

対面

在京都フランス総領事館ジュール・イルマン総領事及び岐阜日仏協会より飯塚保江会長、杉原満理事及び保井円理事が本学を訪問した。一行は、森脇久隆学長をはじめ本学関係者と、フランスとの学術交流状況や留学の推進、宇宙工学分野の研究について活発な意見交換を行った。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000425.html>

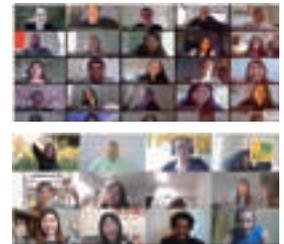


2021年2月22日～3月12日 海外協定大学主催オンライン留学 2021年3月1日～3月12日

オンライン

グリフィス大学（オーストラリア）及びアルバータ大学（カナダ）によるオンライン留学が実施された。参加学生は、英語研修のみならず相手大学の学生とのグループワーク等を通じ、現地の生活や文化について学ぶ機会も得た。海外への渡航が規制される中での新しい留学形態ではあるものの、精力的にプログラムに取り組み、英語力の向上に努めると共に国際理解を深めた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000455.html>



3. 留学生就職促進プログラム関連

4月15日 オンラインによるキャリアガイダンス等

オンライン

例年は対面にて実施している外国人留学生向け就職活動支援プログラムを、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、以下の8つの活動をオンラインで実施した。「キャリアガイダンス」「就活準備講座」「実践型ビジネススキル講座」「就活個別相談会」「夏のインターンシップ対策講座」「内定者とのWEB交流会」「外国人留学生のためのJob Fair」「留学生積極採用企業WEB説明会」

参照：https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/employment_promotion/post_1/



10月28日 愛岐留学生就職支援コンソーシアム岐阜地区ワークショップ

対面

愛岐留学生就職支援コンソーシアムに参画する本学、岐阜県、岐阜県経営者協会、日本貿易振興機構岐阜貿易情報センターとの共催で、外国人留学生が地元企業に就職する際の課題や支援を考えるワークショップが開催された。企業と留学生が一同に会して交流を図ることで、相互理解が深まり留学生の積極的な採用への期待が高まる会となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/information/000411.html>



11月23日 岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会

対面

岐阜県の外国人留学生の日本語学習意欲の喚起及び日本語の表現能力の向上を目的に、19回目となる日本語弁論大会が開催され、岐阜地域留学生交流推進協議会の関係者23名が参加した。渡日できていない外国人留学生も多く、例年に比べ小規模での開催であったが、2機関から参加した4名の留学生は、日本語でのスピーチと活発な質疑応答を通じ、日頃の学習成果を存分に発揮した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000468.html>



2021年1月23日 社会人OB・OGとのオンライン交流会

オンライン

国内企業に就職した外国人卒業生と、これから日本での就職を目指す外国人留学生との交流会を開催した。参加した留学生は、卒業生らの実際の経験を踏まえた就職活動や仕事についてアドバイスを受け、日本での就職活動への意欲をより一層高めると共に、日本企業への理解を深めた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/docs/newsletter50jp.pdf>



4. 日本語・日本文化教育センター関連

【能楽（能・狂言）ワークショップ】

7月15日、日本語・日本文化教育センター（以下、日文センター）和室において、「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ ～映像バージョン2020～」を開催した。平成17年度からプロの能楽師をお迎えして能楽（能・狂言）ワークショップを行ってきたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、当日の参加者を限定した、映像によるワークショップを行った。当日は、日文センター所属の日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生）6名と社会文化プログラム履修生2名のみが参加し、講師の先生方（観世流シテ方の味方團先生および田茂井廣道先生（以上能の講師）、大蔵流狂言方の茂山忠三郎先生および山口耕道先生（以上狂言の講師））に作成していただいた映像を鑑賞した。この映像は録画およびYouTube配信（期間限定）で公開した。

映像の内容は、能楽の歴史についての講義、所作や面における能と狂言の違い、謡や狂言の「大笑い」の体験、能装束の着付け、能の小舞や狂言「寝音曲」の鑑賞など、例年のワークショップに勝るとも劣らない充実したものだった。



【郡上市連携事業】

平成27年度から継続して郡上市と連携事業を行ってきたが、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大、緊急事態宣言等により、当初予定していた活動が不可能となった。しかし、2021年1月28日に行われた郡上市職員研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修）の最終回に、日文センターの教員と留学生がオンラインで参加することができた。同研修は郡上市人事課が担当する事業で、(株)杉インターフェイスがコーディネートした。参加者は研修受講者（郡上市役所職員）10名、留学生（日研生および短期特定課題受託研修生）4名、日文センター教員1名、郡上市担当者（人事課・情報課・杉インターフェイス）若干名で、午前（10：30～12：00）は研修受講者と留学生との交流、午後（13：00～15：00）は日文センター教員による特別講義、研修受講者の成果発表などが行われた。（詳細は『日本語・日本文化教育センター紀要2020』参照）



【日本語・日本文化研修留学生（日研生）の修了論文発表会】

8月9日、全学共通教育棟1C教室において、日研生による修了論文発表会が行われた。今期の日研生は第19期生で、スウェーデン、タイ、中国、ベトナム、ポーランドから本学に留学している6名であった。修了論文の作成は本コースの特色のひとつとなっており、日研生は、1年間の留学を通じて興味をもったトピックについて、教員の指導と本学の日本人学生が務める論文チューターのサポートを受けながら論文を完成させる。「留学生は“日本”をどう見たか」と題する本発表会はその成果を披露する機会となっている。例年、学外からの一般参加も可能とし、大勢の聴衆を迎えての発表会を行っていたが、今年度は来場可能者を学内者および関係者に限定し、その代わりに、初めてライブ配信を試みた。それぞれがパワーポイントを用いてわかりやすく論文内容を説明し、会場からの質問にも丁寧に答え、日頃の学習や研究の成果が十分に発揮された会となった。



学内の国際化の取り組み

* 海外留学フェア2020春、海外留学フェア2020秋

新型コロナウイルス感染症の影響により、春・秋ともに海外留学フェアの開催は中止となった。代替として、グローバル推進機構のホームページにて、関係資料を掲載した。

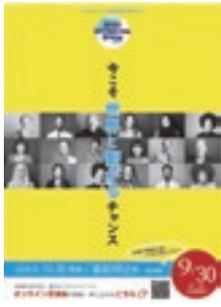
* 若手研究者支援（海外研修プログラム）

グローバル推進機構では、第3期中期目標・中期計画に予定される協働教育担当者の充実を図るために、「岐阜大学若手・中堅研究者海外研修プログラム」を実施している。これは、様々な制約から海外での研究経験を積む機会が乏しかった若手・中堅の教員を対象としたものである。例年海外渡航への支援を行っていたが、令和2年度は渡航を伴わない海外研究機関との共同研究を対象として実施した。

令和2年度採択者

所属部局	氏名(職名)	共同研究機関(国名)	助成額(上限)
工学部	高橋 康宏 (准教授)	ケンタッキー大学工学部 (米国)	250,000円
工学部	岡 夏央 (准教授)	マレーシア国民大学理工学部 (マレーシア)	300,000円
工学部	竹森 洋 (教授)	ボゴール農科大学化学学科 (インドネシア)	157,196円
応用生物科学部	今泉 鉄平 (助教)	モンクリット王トンプリ工科大学生物資源科学科 (タイ)	300,000円
応用生物科学部	島田 敦広 (助教)	イェール大学医学部内科 (米国)	300,000円
応用生物科学部	今村 彰宏 (准教授)	アメリカ海軍医学研究センター (米国)	300,000円
応用生物科学部	猪島 康雄 (教授)	ダーマンホール大学獣医学部 (エジプト)	300,000円
		ベニースエフ大学獣医学部 (エジプト)	
保健管理センター	堀田 亮 (助教)	ペンシルベニア州立大学カウンセリングセンター (米国)	293,700円

* 国際月間（グローバル推進機構主催イベント）

時期（参加人数）	実施内容	
10.1-10.30 (閲覧数44)	「学長からのメッセージの配信」 例年開催していた学長主催国際交流パーティーに代え、令和2年度は学長から、本学の外国人留学生および研究者に向けたメッセージ動画を、グローバル推進機構 YouTube チャンネルにて配信した。	
10.7 (15名)	「Google Earth VR で海外を体験」 Google Earth VR の映像を通して、本学協定大学であるアルバータ大学（カナダ）及びグリフィス大学（オーストラリア）のキャンパスや周辺地域の見学を行った。参加者は、臨場感あふれる映像を通し海外留学への関心を高めた。	
10.9-10.29 (40名（記帳数）)	「国際広報展」 グローバル推進機構の国際交流活動及び本学の四季の風景写真を展示した。工学部杉浦隆教授による撮影と制作協力のもと展示された写真は、多数の来館者の目を楽しませた。	
10.14（35名） 10.28（18名）	「English Circle of Friends」 14日には「How much do you know the world?」、28日には「Halloween」をテーマに、本学の外国人留学生、日本人学生、教職員が英会話を楽しんだ。	
10.14、10.21、10.23、 10.28、10.29 (117名)	「協定大学の学生とのオンライン交流会」 本学学生と、協定大学であるアルバータ大学（カナダ）、ノーザンケンタッキー大学（米国）、ヴィータウタス・マグナス大学（リトアニア）、リール大学（フランス）の学生が、学生生活や食文化など、様々な話題を通じて交流を楽しんだ。	
2020.10.28 (20名)	「岐阜地区ワークショップ」 愛岐留学生就職支援コンソーシアムに参画する岐阜県、岐阜県経営者協会、ジェトロ岐阜、岐阜大学の4機関が共催し、文部科学省委託事業留学生就職促進プログラムとして、留学生が地元企業に就職する際の課題や支援を考えるワークショップを開催した。留学生が「自己PR・日本で働きたい理由」をポスターにまとめて発表し、参加企業からフィードバックを得ることにより、企業の考え方、企業へのPR方法を学んだ。	

留学生就職促進プログラム

留学生就職促進プログラムとは：

成長戦略における「外国人材の我が国企業への就職の拡大」に向け、各大学が地域の自治体や産業界と連携し、就職に必要なスキルである「日本語能力」「日本での企業文化等キャリア教育」「中長期インターンシップ」を一体として学ぶ環境を創設する取組を支援し、外国人留学生の我が国での定着を図るとともに、日本留学の魅力を高め、諸外国から我が国への留学生増加を図る文部科学省委託事業である。平成29年度事業の公募において名古屋大学を中心とする枠組みに本学も参加し、採択された。

*愛岐留学生就職支援コンソーシアム

本プログラムが採択されたことを受け、2017年9月に留学生就職促進プログラムの事業目的に賛同した愛知及び岐阜県下の大学、地方公共団体、経済団体及び企業支援団体が連携し、留学生の国内就職支援を行うことを目的として設立された。(図1参照)

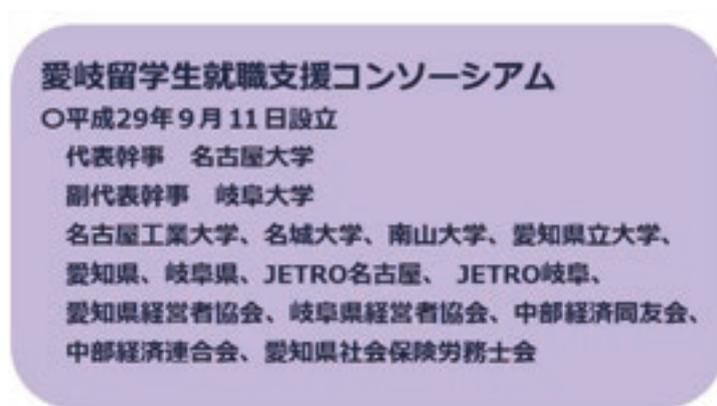


図1

*岐阜大学の役割

岐阜大学の留学生向け(一部はコンソーシアム参画大学、近隣大学も参加可能)にビジネス日本語教育、キャリア教育(キャリアガイダンス、就活個別相談、就活準備講座、実践型ビジネススキル講座等)、インターンシップ及び公的機関・企業との連携イベント(岐阜地区ワークショップ、社会人OB・OGとのオンライン交流会)を実施した。実施にあたっては、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みて、対面実施またはZoomを活用したオンライン開催により、外国人留学生の県内就職促進事業に取り組んだ。

岐阜地域留学生交流推進協議会

岐阜地域留学生交流推進協議会とは：

留学生交流推進会議は各都道府県に設置されている。岐阜県では平成2年2月に「岐阜地域留学生交流推進協議会」(以下「岐留協」)が置かれた。

岐留協は、岐阜県内における留学生の円滑な受入れの促進と交流活動の推進を目的とし、会員は、岐阜県内に所在する大学、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体等42機関からなる。会長は岐阜大学長が務め、本学が事務局を運営している。

* 岐阜地域留学生交流推進協議会総会を開催（7月17日）

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、例年夏に開催している総会をメール審議にて実施した。

総会では、令和元年度事業報告および決算、令和2年度事業計画および予算、第19回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会について審議し、承認された。

今後、特にコロナ禍が外国人留学生に与える影響や、状況の変化に的確に対応しながら、県内の留学生及び岐阜地域全体にとって積極的な活動を展開し、有意義な連携を図っていく。

* 第19回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会を開催（11月23日）

11月23日、岐阜大学サテライトキャンパスにおいて、本学が事務局を務める「岐阜地域留学生交流推進協議会」が、「第19回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会」を開催した。

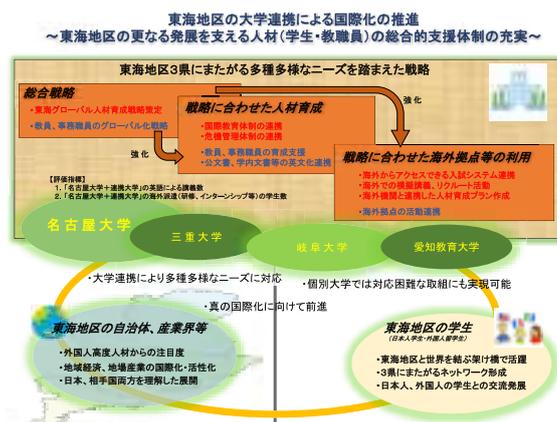
本大会は、平成13年度より外国人留学生の日本語学習意欲の喚起及び日本語の表現能力の向上を目的として行っており、新型コロナウイルス感染症の対策を十分に徹底した上で、対面形式で開催した。開催にあたっては、留学生の渡日が困難であったことから、本学からの発表者はなかったものの、岐阜県内の大学、短期大学等の2機関から集まった4名（2カ国）の出席者が、それぞれ約7分間の日本語のスピーチを行い、日頃の努力の成果を存分に発揮した。

小規模の開催であったからこそ、審査員との質疑応答の時間を十分に確保でき、日本語学習への更なる意欲の喚起及び日本文化の認識につながる大変有意義な大会となった。

4 大学連携事業

本事業は、産業集積地である東海地域において、加速度的なグローバル化を必要とするビジネス展開を支援することを目的としている。また、学生・教職員のグローバル化を促進する人材育成体制を、大学との連携・協同で実施し、真に国際化された大学群を目指している。本事業は平成28年度から始まり、6年間実施される予定である。

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、プログラムは中止となった。



令和2年度 4大学（岐阜大学・名古屋大学・三重大学・愛知教育大学）連携事業一覧

事業名	内容	対象	岐阜大学参加状況
同済大学夏の短期中国語研修プログラム	中国語研修（主に会話の強化）、文化体験、上海市内見学など	学生	プログラム中止
南京大学短期中国語研修プログラム	中国語研修（主に会話の強化）、文化体験など	学生	プログラム中止
フライブルク大学短期ドイツ語研修プログラム	ドイツのフライブルク大学にてドイツ語授業や文化体験、見学活動など	学生	プログラム中止

ユネスコスクール活動支援

本学は、平成23年度にユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）に加盟し、岐阜県・岐阜市の教育委員会や県下のユネスコ協会、その他関係機関と連携しながら、県下のユネスコスクール拡大に取り組んでいる。

現在、岐阜県下では48校（2021年4月現在）が加盟しており、それぞれ地域に根ざした特色のある活動を行っている。平成29年度よりチャレンジ期間やユネスコスクールオンラインツールシステムの導入等、ユネスコスクール加盟申請手続きが刷新され、今後も普及と拡大が期待される。下記に、令和2年度の主な活動を紹介する。

*ユネスコスクール加盟申請手続きに係る支援

現在、加盟申請手続きを予定している学校がある。今後チャレンジ期間を開始する予定である同校を訪問し、今後の加盟申請手続きについて進捗状況を確認した。

*ユネスコスクール活動支援

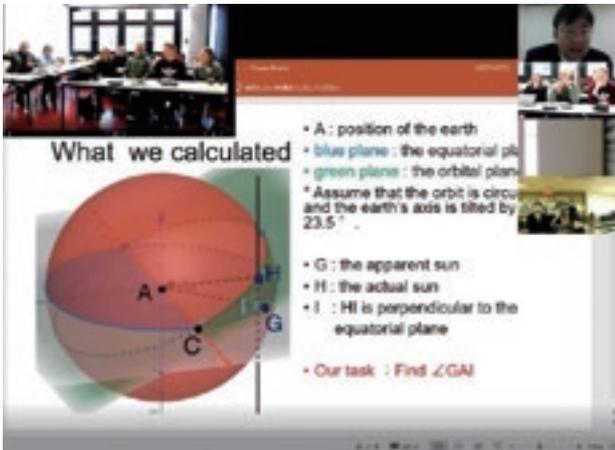
県下の学校の活動の様子を把握するとともに、今後も県下の学校のユネスコスクール加盟への関心を高め、ユネスコスクールの加盟申請方法や内容について広く周知するとともに、加盟後の継続的な活動発展に寄与することを目指している。

II. 各学部・研究科等の主な国際交流活動

1. 教育学部

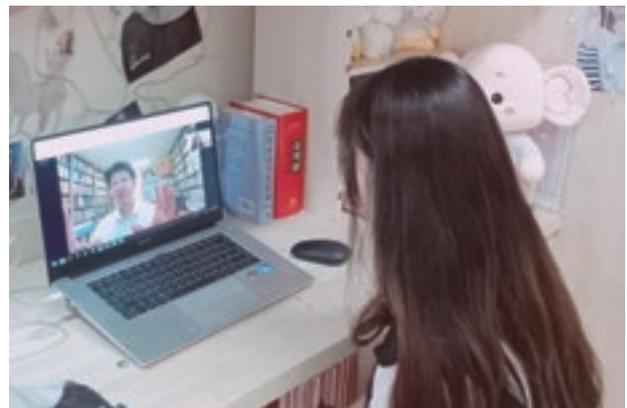
日独国際遠隔協働ゼミナールをカールスルーエ教育大学（ドイツ）及びSSHと共同開催（2019年12月～2020年1月）

教育学部は、2019年12月から2020年1月までの間、カールスルーエ教育大学（ドイツ）とスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校の京都府立嵯峨野高等学校および京都市立堀川高等学校と共に、高大接続の日独国際遠隔協働ゼミナールを実施した。「太陽・地球・月の天体の動き」を課題とし、大学生は基礎的な理論の提供を、高校生はその理論に対する探究を行い、大学生と高校生との間で研究協議を行った。高校生達は球面幾何学を駆使しながら、皆既日食や月の満ち欠けの構造、一年中見える北斗七星の地球上の位置を解析した。中学校から高校にかけての「軌跡を含める空間図形」は日本とドイツ両国共通の教育的課題であり、両国教員間で教材の意義を確かめ合った。また新たにWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）の京都校への支援依頼を受け、より良い発展を描いた。



交換留学生へのオンデマンド講義の実施（4月10日～8月7日）

4月から交換留学生として来日する予定であった電子科技大学（中国）の黄麗（コウレイ）さんが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、渡航できなかった。このため、教育学部では、前学期の間、教育学や文学関係の講義を、すべてオンデマンドで実施した。動画がうまく視聴できないなどのトラブルもあったが、黄さんは講義資料を読み込み、全ての課題を提出した。後学期も指導教員やチューターの学生とZoomを利用し、引き続きオンラインで交流を深めた。



2. 地域科学部

FD 兼留学報告会（12月16日）

12月16日に、地域科学部国際教養コース3期生11名の留学体験について、学部内での情報共有を図ることを目的として、FD 兼留学報告会を開催した。対象のコース学生は新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響により留学の途中で帰国せざるを得ず、そのため報告会では現地での学習や生活に関する報告に加え、感染症の状況を注視しながらの緊急帰国や、帰国後の隔離期間中の生活、帰国後のオンラインによる留学先の講義受講など、貴重な経験が報告された。その後、国際交流委員長より学生の帰国後に行った留学アンケート調査の結果について報告された。報告会にはリモートも含め35名の教職員が参加し、コース学生もリモートで発表を行った。またコース4期生も6名参加しており、今後留学を考える際に有用な情報提供の機会となった。



国立中央大学文学院（台湾）と部局間学術交流協定の締結（2021年1月18日）

2021年1月18日に地域科学部と国立中央大学文学院（台湾）との間に部局間学術交流協定が締結された。国際教養プログラムを有する地域科学部としては、学生の派遣先である学術交流協定校との情報交換を行うとともに新規派遣先の開拓も積極的に行ってきたが、毎年中国語圏の大学への留学希望がある中、本部局間交流協定の締結は、交換留学のみならず研究者交流等、「ポストコロナ」における活発な交流が展望できる。

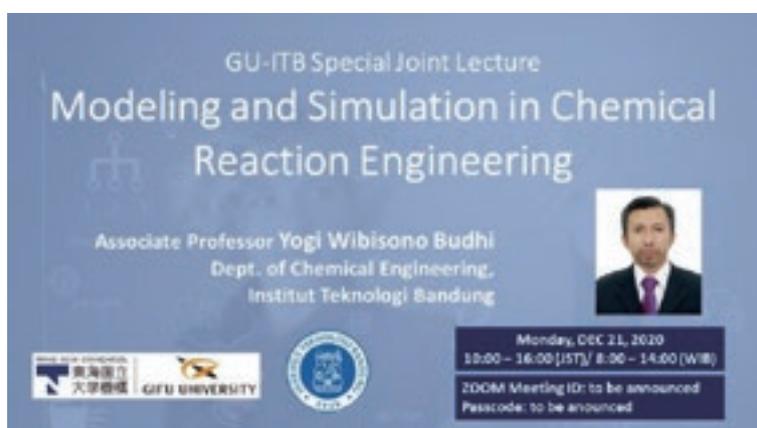
国際教養コース学生のオンライン英語研修プログラム等への参加 （2021年3月1日～3月12日、2021年2月22日～3月12日）

地域科学部国際教養コース4期生は、令和2年度夏に協定校に留学予定であったが、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響により、派遣を延期した。そのため、令和2年度はアルバータ大学（カナダ）のオンライン英語研修プログラム（2021年3月1日～3月12日）に5名が、グリフィス大学（オーストラリア）のオンライン英語研修プログラム（2021年2月22日～3月12日）に8名が、それぞれ参加した。参加学生はオンラインながら、英語による会話や学習を行うことができ、「日本にいながらも毎日4時間ほど英語に触れることが出来た」、「頻りにグループワークがあり、スピーキング力の向上につながった」など、概ね好評であった。

3. 工学部

岐阜大学－バンドン工科大学 (ITB) と Joint lecture を実施 (12月21日)

工学部化学・生命工学科の宮本学准教授がバンドン工科大学 (ITB) の Yogi Wibisono Budhi 准教授を招き、「Modeling and Simulation in Chemical Reaction Engineering」と題した岐阜大学－バンドン工科大学ジョイント講義を開催した。本講義には岐阜大学より21名の学生が、ITB より20名の学生が参加した。本講義では、化学プロセス構築において重要な化学反応の工学的モデリングおよび有限要素法を用いた数値計算ソフト Flex PDE を用いた化学反応プロセスシミュレーションについて、その重要性と基本的な化学反応モデルの説明があり、その後、数値計算ソフトを用いたシミュレーションについて演習を通じて学習した。演習では、両大学の学生がグループに分かれ共同で実施する機会が設けられたことから、化学反応工学の基礎を学ぶとともに両大学学生の交流を深める良い機会となった。



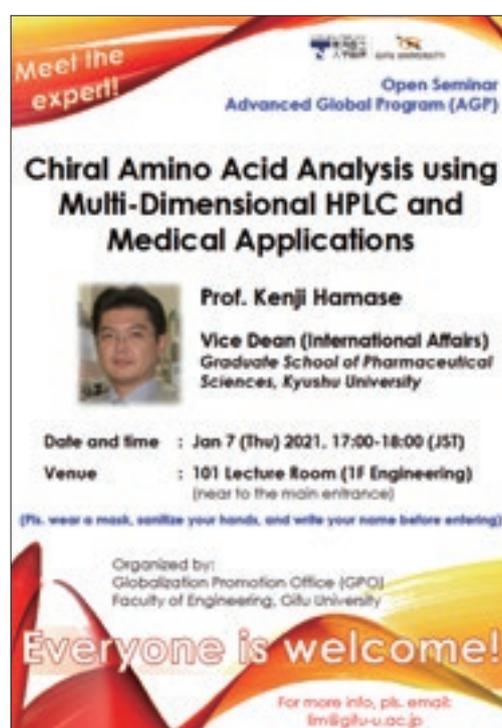
アドバンスド・グローバル・プログラム (AGP) 学生向けオープンセミナー開催 (2021年1月7日)

工学部生命科学・化学専攻リム・リーワ教授が、九州大学大学院薬学研究院・副院長の浜瀬健司氏を招き、「多次元 HPLC を用いたキラルアミノ酸分析および医療分野への応用」と題した講演を実施した。この講演は、主として AGP 生に向け実施された。

2021年1月7日に工学部棟101教室にて行われた本講演では、時節柄、感染予防のためのマスク着用、手指消毒等を徹底した。

留学生を含め約18名の学生が参加し、大いに学び、楽しんだ。

外部講師による講演は、時に、学生たちにとって大いなる刺激になると実感した講演でもあった。



4. 応用生物科学部

海外留学説明会の開催（7月27日）

応用生物科学部グローバル推進室では、JASSO による海外留学支援制度等を利用した各種留学プログラムの募集にあたり、7月27日に海外留学説明会を開催した。

本説明会は、学部、修士、博士学生向けに例年学部内で開催しており、令和2年度は感染症対策のため原則オンラインで開催した。当日は、オンライン・対面含め17名の学生の参加があった。参加した学生は、プログラム担当教員による留学制度の説明や、4名の留学経験者（ESL、EST、JD 及び海外留学支援制度の協定大学派遣に参加）による留学報告のプレゼンテーションに熱心に耳を傾けた。



応用生物科学部グローバル推進室では、海外渡航が可能となる日に向け、今後も積極的に留学プログラムの案内や留学経験者との交流の機会の提供を行っていく。

5. 医学系研究科

医療者教育学専攻（修士課程）の新設（4月1日）

医学系研究科では、全国の医療系大学や医療機関の指導者を対象として、医療者教育学の体系的な理解と教育力のスキルアップを図るため、医療者教育学専攻修士課程（Master of Health Professions Education: MHPE）を令和2年度に我が国で初めて設置した。

グローバル化の時代に相応しい学識を身につけるため、2つの専門科目において協定校のマギル大学（カナダ）とともに、オンライン学習用の教材を共同開発し授業に活用した。科目「学習者評価の原理と評価方法」では、R2C2モデルという先駆的な評価モデルの概説をうかがうことができた。また科目「医療者教育におけるグローバル化と日本での展開」では、二国間での医療者教育を対比させる際の平等な視座を持つ重要性をうかがうことができた。修士学生からは、最新の論文に基づき、海外のエキスパートの生の声を視聴することができる動画は大変刺激的であったと好評であった。また、日本に親和性の高い海外の指導者が講師となり、日本に対するポジティブな意見を聴くことができたことにより、日本からも自信をもって情報発信しようとする意欲的な声も聞かれた。

今後は教材を段階的に増やすほか、よりインタラクティブな履修ができるよう、オンライン授業の開発を進めていく計画である。



6. 連合農学研究科

The 5th ICCC 2020: Lessons Learn from COVID-19 Pandemic for Climate Change Adaption and Mitigation Strategies (9月24日)

連合農学研究科は、9月24日に、スブラス・マレット大学（インドネシア）、ウダヤナ大学（インドネシア）、Waterpedia（オランダ）、Indonesia Expert Network for Climate Change and Forestry（インドネシア）およびThe United Nations Framework Convention on Climate Change（ドイツ）と共催し、第5回 International Conference on Climate Change 2020（ICCC）を開催した。「Lessons Learn from Covid-19 Pandemic for Climate Change Adaption and Mitigation Strategies」と題した本会議では、連合農学研究科から平松研研究科長、田中貴助教が参加した。平松研研究科長により開会の挨拶が、田中助教により「コロナ禍における食品流通の変化と対応」についての基調講演が行なわれた。ICCCには、基調講演者8名のほか、パラレルセッションでのべ190名が発表を行い、参加者による活発な議論が行われた。



平松研究科長の開会挨拶



田中助教の講演

ICCCは今年度で5回目を迎え、気候変動が人間生活や環境問題に与える影響をモニタリングし、改善するための努力を継続して行っており、環境、農業、法律、社会、経済、文化など様々な視点から気候変動に関する課題が議論された。また、今年は新型コロナウイルスの流行が気候変動に及ぼす影響についても話し合われた。これらの成果は論文として取りまとめられ、現時点で、117編が提出された。このうち、92編はIOP、7編がJournal of Sains Tanah、5編がIndonesian Journal of Geography、2編がIndonesian Journal of Biotechnology、6編がAgrivita Journal、そして5編がRAS^{*}にて公開される予定である。ICCCの成果が研究者、技術者による気候変動研究の発展に大きく貢献することが期待される。

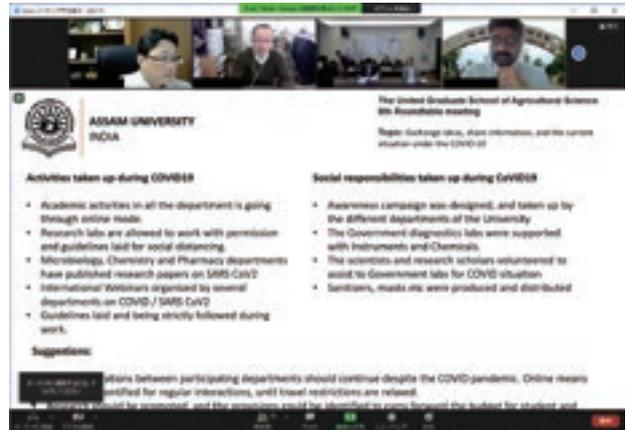
※ RAS : Reviews in Agricultural Science…連合農学研究科によって2013年に創刊されたオンラインジャーナル

The 8th IC-GU12 Roundtable 2020 (第8回農学系博士教育国際連携円卓会議) (11月10日)

連合農学研究科は、11月10日に南部アジア農学系博士課程教育連携コンソーシアム加盟校（日本を含む南部アジア地域9カ国20大学。以下、IC-GU12という）による、「The 8th IC-GU12 Roundtable 2020」（以下、ラウンドテーブルという）をオンライン（Zoom）で開催した。

本ラウンドテーブルは、2012年の第1回会議から毎年開催されている。IC-GU12加盟校の代表者が、教育、研究についての現況と課題について、幅広く情報交換を行っている。今年度は「コロナ禍における教育の提案と各大学の対策」をテーマに、それぞれの大学が新型コロナウイルス感染症の流行前後でどう変わったか、今後どのような方針をとる予定かについて話し合いを行った。15大学から参加した約40名の教員により、各国の状況と対策を交流し、研究科として今後の方針を考える上で有意義な会議となった。

ラウンドテーブル終了後は、本学流域水環境リーダー育成プログラムと共催にてポスター発表を行った。こちらもオンライン（Zoom）での開催となったが、IC-GU12の教員や本学修了生など約40名が聴講のもと、3セッションで学生20名による発表が行われ、優秀発表学生5名にはポスター賞が授与された。



ラウンドテーブルの様子



ポスター賞受賞者の集合写真

Ⅲ. 大学の国際化と学生支援

COVID-19の流行下における留学生受入に係る体験談 ～マレーシア国民大学の JD 一期生の声とともに～

工学部教授 リム リーワ

1. 緒言

COVID-19の蔓延により、私達の生活は一変した。「K字型」の景気回復が続く中、1年の延期をしたオリンピックの開催について、国内外でも賛否両論あり（むしろ批判的な声が多い）、この地球規模の課題を解決するには、国際的な協力の必要性があることが再認識された。大学では、対面と on-demand (e-Learning) を効果的に組み合わせたハイブリッド教育を行っており、教員は正確な情報に基づいて感染拡大を防止しながら、研究活動も行わなければいけないため、“お陰様で”非常に充実した（＝とても大変な）日々を送っている。

コロナ禍により最も変化したのは、不幸中の幸いで、オンライン教育が一挙に進んだことである。リアルな海外交流が制限されたことは、グローバル化・グローカル化を推進する本学にとっては大きな打撃であったが、海外協定校との相互的な遠隔講義をしたり、オンラインでの学生交流活動を行ったり、またオンラインで国際会議を開催・参加するなど、従来にない交流活動が行われている。

そんな中、問題・議論となった（なっている）のが、新規留学生の受入である。特に正規生（学位取得型プログラム）に対する教育・研究の質保証について、教員間でも意見がわかれた。以下簡単に紹介する。

2. 留学生の受入れについて

まず、2020年3月末～4月上旬にかけて、予定されていた留学生（国費留学生を含め）ほぼ全ての来日がキャンセルになった。インターネット環境が比較的整っている国（インド、インドネシア、ブータン、マレーシア）では、オンラインでの指導が可能であったが、インドネシアの一部の学生やミャンマーの学生は指導教員と相談した上で休学または入学を延期した。感染者数が減少した9月辺りから、新規の国費留学生や一時帰国中の在籍生（再入国許可を得ている留学生）のみの入国が認められ、通常の入国審査書類に加え、新たに必要となった誓約書（大学側が発行する担保証明）を持って、15日間の隔離を経て来岐した。その後、国にもよるが、新規の私費留学生（中国、タイ、ベトナム、マレーシア）の入国も許された。しかし、ご存じのように、年末年始にかけてまた感染者数が急増し、水際対策がさらに強化されたため、私費留学生の多くは未だ来日できず、オンライン指導を受けながら次の学年に進んだ。そして令和3年度に新たに入学した学生も、同様に遠隔か、あるいは休学・入学延期かの選択を迫られ、来日できないままの留学生はさらに増えた。

本学では、様々な工夫をして、あらゆる面で学生への支援を積極的に行っている。特に経済的に困窮している学生に対して給付金の支給も行っている。海外協定校では、このような経済的支援はほとんどなく、一部の国では、授業料が払えず休学に追いやられたケースもあったようである。

研究の面では、本学ではほとんど支障はなく、従来通り研究活動が行われているが、海外の姉妹校ではわずか一部の研究ベースの大学院生のみ、大学からの許可（毎月申請・承認が必要）をもらい、入校できるようである。

3. ジョイント・ディグリー（JD）関係者からの声

3.1 岐阜大学・マレーシア国民大学国際連携材料科学工学専攻 専攻長・杓水祥一教授 『令和2年度 JD 活動を振り返って』

令和2年度の JD 活動を俯瞰して一言述べさせていただきます。岐阜大学・マレーシア国民大学（UKM）間の JD 学位プログラムは2019年にスタートし、2020年にはいよいよ UKM より1期生を受け入れて、JD

学位プログラムのもっとも大切な研究教育が始まるということで、関係者一同わくわくしながらこの年を迎えました。ご存じない方々もおられるかもしれないので説明させていただきますと、JD 学位プログラムは、単なる国際共同研究の学位プログラムではなく、併せて相手国の歴史、文化、地域に直に触れることで、多様な研究思考を身につけ、その経験を学位取得後のアジア圏での研究者・技術者活動に生かしてもらおうというものです。相手国に居住しての1年間の研究活動はそのために用意されています。

ご存じのように、令和2年度を迎える少し前から始まった新型コロナウイルス感染症の蔓延は、世界を一変させてしまいました。たちまち多くの困難をこのJD学位プログラムに与えることになりました。幸いにも、1期生については、感染者数減少の小康時期に、半年遅れで受け入れることができました。関係の方々には献身的なご協力をいただきました。しかし、世界は依然、新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされており、その克服には至っていません。いましばらくは、通信機能を活用したオンライン交流をも活用しながら凌ぐしかない状況です。そして、この状況はこれまで当たり前のように行ってきた、私たちの他国間の交流の貴重さを再認識することになっています。少しでも早く、本来のJD学位プログラムに戻ることを願っています。



専攻長・沓水教授

3.2 岐阜大学・マレーシア国民大学国際連携材料科学工学専攻学生 (D3)・Nabilah Binti Suhaili (home university: UKM)

“The student life during COVID-19 pandemic”

The COVID-19 has greatly affected my student life as a JD student between UKM, Malaysia and Gifu University, Japan. As mentioned in the JD Program MOU, we were scheduled to register our study in Gifu University from 1 April 2020. Unfortunately due to this pandemic outbreak, our flight to Japan was cancelled as Japan had closed all the border. Furthermore, the lecturers, students and even administration office worker had been asked to work from home for everyone's safety. The research activities in UKM, Malaysia have been greatly affected as the university closed for several months and later resumed as usual but with stricter rules. Virtual learning and attending online seminar have become a norm, many extracurricular have vanished and social lives have limited for students complying with measures to stop the spread of COVID-19. Thank God that finally, after a long wait we got a permission to fly to Japan in the end of November 2020 with several conditions (pledge, PCR test, 2 weeks quarantine, etc.) . After such struggle, we feel so lucky to be here and are able to do research like usual in Gifu University. On the other hand, some JD students from India still cannot come to Japan due to this pandemic. In Gifu University, there are many facilities provided for the international students such as International student house (kaikan) , halal menu in the cafeteria, International room (Prayer room) and others. Based on the MOU of JD program, we are scheduled to stay in Gifu University for 1 year, which is until December 2021. However, we need to move out from kaikan from September 2021 due to the strict regulation and inflexibility of the rules of kaikan. Although there are many vacant rooms available, we cannot stay in kaikan. So as a foreign student, it is hard for me to find another accommodation for another 3-4 months, because the contract for most apartments usually did not accept rental less than 1 year. For the research perspective, there are many analysis instrumentation are available in the Bunseki center where students can conduct the analysis by themselves. In term of social lives, there are a little restriction and regulation where we cannot attend or hold a lab party, soft ball tournament, lab trips and others. Many thing have changed due to this pandemic, however I believe there must be a good reason behind everything that happened. “Never lose hope & never give up. Keep your head high, when the going gets rough.”



At the cafeteria

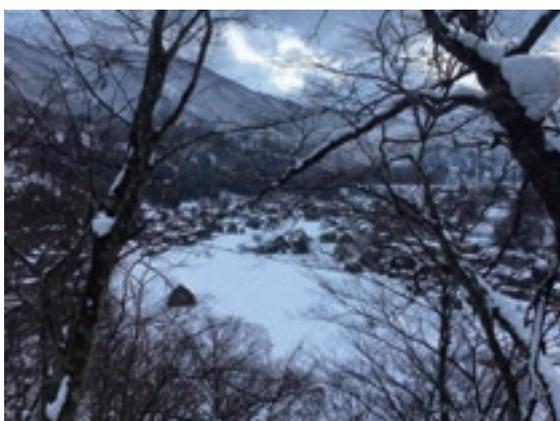


In front of Gifu Mosque

3.3 岐阜大学・マレーシア国民大学国際連携材料科学工学専攻学生 (D3)・Noraisyah binti Abdul Kadir Jilani (home university: UKM)

“Road taken as the first JD student’s”

I believe that every one of us are affected by the corona virus directly or indirectly. For me, the timeline for research is far behind because of the corona virus. We actually supposed to arrive on early March 2020, but suddenly a week before that, corona virus emerged and the border of the country closed. Thankfully, several months after, all of us have learned more about the virus and able to cope and live with it. So, we can cross the border and be here. Actually, one of the procedure needed to enter was written a pledge. It was a hassle and also burdensome as the company or university has to bear the consequences of our actions. One’s of the plus point when we do research in Gifu University is that the scenery around the university is mesmerizing, surrounded with hills, river and rice paddy. It’s provided peaceful of mind as we became close to the nature. Besides, our staying in Kaikan International Houses was wonderful. Hopefully, we can stay here throughout our study in Japan. So that we will not waste the money to buy the furniture, amenities etc. for just another month of staying. Hoping for some leniency in our cases. And for the information, we are muslim. Muslim is a minority in Japan. But do not worry, in terms of foods there are a lot that we can eat. The university cafeteria also sold halal foods for us to eat our lunch. Although the choice is limited, but there is. Furthermore, we can find some halal restaurants (i.e. JST, Moti) near the campus. Luckily for us, this year around the snow is heavy, so we can experience the cold season. There are also a lot of magical places in Japan for us to visit while keeping the S.O.P. (i.e. Shirakawago UNESCO’s World Heritage Sites, Yoshino-Kumano National Park) . Let’s become one of us.



Amazing Winter look of the Shirakawago



At the Sandanbeki Rock Cliff



4. 最後に

誰も経験したことのないパンデミックの中でオンライン教育が全世界で実施されるようになり、大学教育のあり方も変化を迫られている。「来日できないまま学位を取らせるのか?」「JD は国際共同研究と何が違うのか?」「UKM ではあまり実験できないから、早く日本に行きたい」「いつ日本に行けますか?」など、同僚からも学生からも様々な意見・コメント・要望等が寄せられてきている。世界を変えた COVID-19は、ある意味で世界の国・大学機能等を平準化してくれた。ちょうどタイムリーなことに、2020年4月に東海国立大学機構が発足した。ロゴにある「MAKE NEW STANDARDS.」のように、これからは大学独自の役割がいかに世界の中で認識され、またどのような価値を担うのか重要な課題になって来ると思われる。

しかし、世界最高水準の研究展開や国際通用性のある質の高い教育実践などを目指すためには、一受入教員として、大学のインフラとも言える学生寮（特に留学生用の宿舎）を整備・増設して頂きたい。単なる民間アパートの紹介のみではなく、少なくとも、私費留学生の手に届くような値段設定になるように交渉して頂きたい。

また、部局内・部局間の情報共有の改善が必要であると感じている。留学生とのやり取りはほぼ全て受入教員が行っているが、特に未経験者には、初めて見る書類（しかも英語に訳さなければいけない重要な連絡）は、学術論文投稿より難関であると思う。「これも僕（私）がやらなきゃいけないんですか」と聞かれた時に、「地方大学だから、マンパワーが足りないので…すみません、お願いします!」と答えているが、今後留学生の受入れやすい環境にも、是非とも TOKAI 機構の力（予算?）を発揮し、DX イノベーションを起こして欲しい。

Money is not everything, but without money we can't do anything!

最後になるが、厳しい状況にも必ず終わりが来る!と信じて、微力ながら（愚痴りながら/笑）、今後も大好きな岐阜大学を支えていきたい。

コロナ禍における留学生支援

国際事業課長 北野 信哉

新型コロナウイルス感染症の拡大で始まった令和2年度は、大学の国際交流はコロナ禍の影響を大きく受け、留学生が経済的に困難な状況に陥ったり、出入国の制限を受けたりするなど著しい停滞を招くこととなった。この状況に対してグローバル推進機構では、留学生に対する様々な支援を行った。

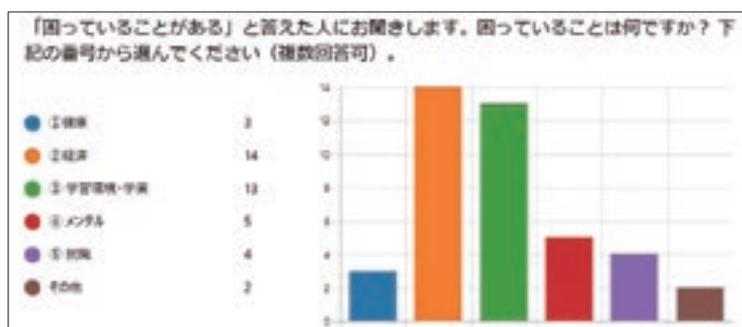
1. 大学からの支援

1) 外国人留学生への支援

・アンケート調査

グローバル推進機構では2020年4月に新型コロナウイルスの感染拡大による外国人留学生への影響を調査すべく、支援に先立ちアンケートによる調査を実施した。

調査の結果、アルバイトが激減した、生活が困難になった、卒業できるか心配など、経済面、学業面での回答が目立った。



留学生へのアンケート調査（抜粋）

・岐阜大学外国人留学生一時金貸付

アンケート調査の回答を受け、5月11日に「岐阜大学外国人留学生一時金貸付」の取扱要項を制定、外国人留学生を対象に無利子で5万円又は10万円を貸付けることにより経済的に困窮している外国人留学生を支援した。その後、岐阜大学からの1人あたり3万円の生活支援金や国からの1人あたり10万円の特別定額給付金が順次給付されたこともあり、申請者は5万円及び10万円がそれぞれ1名にとどまった。

・国際交流会館入居者への支援

外国人留学生の生活の場である国際交流会館については、感染の防止やコロナ禍特有の運用による支援を行った。各居室には、ハンドソープ、アルコール消毒液を用意し手指消毒を促すとともに体温計も入口等に備え置くなど感染対策を行った。さらに長期休業期間等には注意喚起の文書を掲示した。また、居住者が発熱するなどの事態もあったが、PCR検査の結果が出るまで隔離可能な居室へ移動させるなどの対応を行った。新型コロナウイルス感染症の影響により渡日が大幅に遅れた学生及び母国へ帰国できない学生等については、特例措置として入居の延長を認める支援を行った。



国際交流会館居室に備え置かれたハンドソープ、アルコール消毒液並びに感染対策の掲示物



国際交流会館に掲示された感染対策の掲示物

・外国人留学生の渡日入国時の待機期間の支援

新型コロナウイルス感染症の拡大により外国からの入国が制限される中、2020年10月以降、外務省通知「再開に向けた段階的措置」に基づき、一定の制約と入国にあたっての防疫措置を遵守することを条件に、外国人留学生が順次渡日する状況となった。渡日後、ホテル等での14日間の待機及び待機期間中の公共交通機関の不使用が要請されており、渡日する留学生にとってホテルの滞在費用及び大学までの移動は大きな負担となった。この負担を軽減するため、ホテル等に待機する場合には滞在費の一部支援

(1人当たり上限3,000円×15泊)を行い、ホテル以外の待機場所で待機する場合には借り上げバスの代金の一部支援を行った。なお、借り上げバス代金の一部支援については、東海国立大学機構の支援として名古屋大学が手配したバスに便乗する形で実施したものである。また、待機期間中は土日祝日も含めて毎日体調等を保健所に報告することも要請されており、その取りまとめや連絡等の支援も行った。



借り上げバスの支援

・今後の支援

2021年3月31日現在も新型コロナウイルス感染症は依然として全世界で猛威をふるっており、新たな変異株の国内感染者も確認されている。すでに4月渡日を予定している外国人留学生には渡日入国時の待機期間の支援を継続して行うこととしており、国際交流会館入居者への感染防止等の支援も感染状況に対応しながら実施したいと考えている。

2) 日本人留学生への支援

・オンライン留学の提供

令和2年度の日本人留学生の海外への派遣は、交換留学、夏期短期留学(サマースクール)とも新型コロナウイルス感染症拡大の状況から判断し、中止となった。このため、実地への派遣ではなく、「オンライン留学」という形で年度内に実施することとした。2021年2月及び3月に本学の協定大学であるグリフィス大学(オーストラリア)及びアルバータ大学(カナダ)の「オンライン留学」を以下のとおり実施した。学生たちは、話す、聞く、読む、書く、の4技能を向上させながらグループワーク等のアクティビティを通して現地の留学生や他大学の学生と多くの交流の機会を持つことができた。

グリフィス大学：

Direct Entry Program Online (DEPO)
2021年2月22日から3月12日まで(3週間)
計60時間(同時配信)
参加者 9名



グリフィス大学オンライン留学の様子

アルバータ大学：

Communication Skills for Global Citizenship Online (CSGCO)
2021年3月1日から12日まで(2週間)
計25時間(同時配信15時間+オンデマンド配信10時間)
参加者 5名



アルバータ大学オンライン留学の様子

・今後の支援

外国人留学生への支援同様、世界の感染状況に鑑みながら渡航の可否等を判断することになるが、令和3年度の夏期短期留学（サマースクール）はオンラインで実施することを予定している。また、令和元年度及び令和2年度に短期留学（派遣）奨学金が採択されたが留学中止となった学生がおり、これらの学生が渡航可能となった場合には、奨学金を支給できるように確保する予定である。

2. 外部団体からの支援

コロナ禍により経済的に困窮する学生を支援するため以下のとおり各団体からの支援があった。

・お米の寄附

5月29日に株式会社みらい（岐阜市）の上田健太郎社長と、農業組合法人桜尾生産組合（山形市）の平野良次組合長から、お米（ハツシモ）400kgの寄附をいただいた。寄附されたお米は、本学黒野寮生と国際交流会館に居住する留学生らに配付された。



お米の寄附

・機内食（オリジナルドリンク）の寄附

7月3日に日本航空株式会社（JAL）から、新型コロナウイルス感染症の影響により経済的に困窮している学生に、機内食である「JALオリジナルドリンク（SKY TIME キウイ）」1ℓ及び「個別包装のあられパック」330セットを寄附していただいた。これらの機内食は、日本人学生のほか、国際交流会館に居住する留学生らに配付された



寄附された機内食

・岐阜南ライオンズクラブからの支援金

8月12日に岐阜南ライオンズクラブから本学外国人留学生に支援金が贈呈された。岐阜南ライオンズクラブからは、毎年3名の留学生に1人12万円の奨学金を支給いただいているが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、アルバイトができない等で生活が困窮している留学生が多くいる実情を考慮いただき、10名の留学生に1人5万円の支援金を贈呈いただいた。贈呈された留学生からは「家賃やガス代が払えます。生活のストレスが解消されました。本当にありがとうございました。」等、感謝の意が述べられた。



岐阜南ライオンズクラブの支援金贈呈式での集合写真

英語による教授法トレーニングプログラムの導入について

グローバル推進機構特任助教
松井 真弓

1. 導入の経緯

本学の将来ビジョンの「地域に根ざした国際化と成果の地域還元」の推進にあたり、グローバル推進機構では各部局の協力を経て、主な取組にも挙げられているグローバル人材養成プログラム、日本人学生と留学生の混在型教育の充実及び海外協定大学とのジョイント・ディグリープログラム（JDP）といった国際性豊かな教育体制の整備をサポートしている。本稿では、令和2年度に新規実施した「英語による教授法トレーニングプログラム」が、どのような経緯で、また何を狙って導入され、その結果が何に繋がり得るのかについて紹介したい。

今回、アルバータ大学（カナダ）が提供する英語による教授法トレーニングプログラム（APPEMI：The Advanced Professional Program in English-medium Instruction）を導入したが、その発端はJDPを実施する部局の先生方からの「英語による授業科目の担当教員数を増やす方策が何かないか」というリクエストによるものだ。JDPの運営を支援する国際協働教育推進部門において、2018年末ごろから検討され始め、コウレイモンド特任准教授（グローバル推進機構）を中心にアルバータ大学との交渉により実現した。検討当初は教員のアルバータ大学への派遣プログラムを考えていたが、COVID-19の影響もあり初回実施がオンライン開催となった。

大学教員は中等教育までの教諭とは異なり、授業担当の際に教授法の指導を受ける機会にはほぼない。自身の教育手法が適しているか、ポストコロナ時代のICTが日常化した社会での教育方法はどのようなツールや形態をとるべきか等、母語である日本語での授業でも日々試行錯誤されている先生方が多いのではないかと推察する。ましてや英語での講義となるとハードルがまた上がるのが実情だろう。今回のグローバル推進機構におけるAPPEMI導入の狙いとしては、英語による授業提供のハードルを少しでも下げることで、将来的に英語で提供される授業数を増やし、また、未だ国際協働教育プログラムを実施していない学部においても取り組もうとされる教員が増えることを期待している。英語（又は外国語）による授業数やJDP等の国際教育プログラム数等は大学の国際化の指標として評価される項目の一つにもなっており、このような学内の国際化体制の支援は本学の国際性を高める手段の一つと言えるだろう。

2. プログラムの内容

今回初めて導入したアルバータ大学提供のAPPEMIは、10年以上の実施歴を持ちCanadian Association for University Continuing Education（CAUCE）でも認められている英語での教授法トレーニングプログラムで、大学ランキング上昇に意欲的な中国の大学だけでなく、日本においても和歌山大学、熊本大学でも導入実績がある。本学内で募集通知した際の実施要項に記載したプログラム内容を表1に示す。学内募集の結果、参加者総数は15名、内訳は流域圏科学研究センター2名、地域科学部2名、医学部看護学科1名、工学部5名、応用生物科学部5名であった。

表1. 令和2年度アルバータ大学教員向けオンライントレーニングプログラム実施要項（抜粋・一部改変）

対象	教授、准教授、講師及び助教
受講人数	12名～16名
日程	2021年3月8日～10日、15日～18日、22日～26日、29日・30日（合計14日間）
開催時間	各日9時～10時30分（1時間半／日、計21時間）
参加方法	各研修者の居室にて各自所有のPC等からZoomにより参加



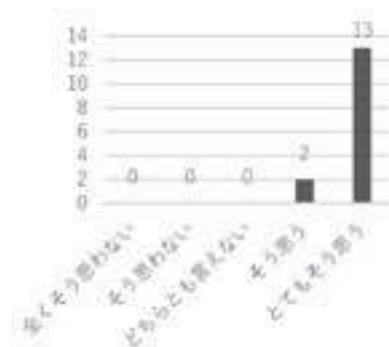
研修内容	<p>1) EXTL 5714 Introduction to English-medium Instruction (EMI) 英語での教員の講義及び学生の学習法を理解して実践することに焦点がおかれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生中心の学習法についての導入、アクティブラーニング ・英語での教員の講義及び学生の学習を母語で行うことと英語で行うことの共通点と相違点 ・EMI における専門用語、一般学術用語について ・聞き取りやすい発音の最新手法 <p>2) EXTL 5706 Instructional Design Basics for Higher Education Contexts 授業計画など効果的な指導計画に焦点がおかれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成的な整合性のある教育デザイン ・模擬授業
------	---

3. 参加教員からの受講後アンケート調査結果

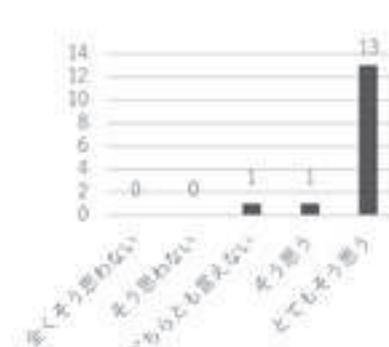
プログラム終了後にコウ特任准教授が項目を作成したアンケート調査を国際事業課国際総務室が実施し、参加者15名全員から回答を得た。集計結果を（1）～（7）に示す。

（1）参加者満足度について

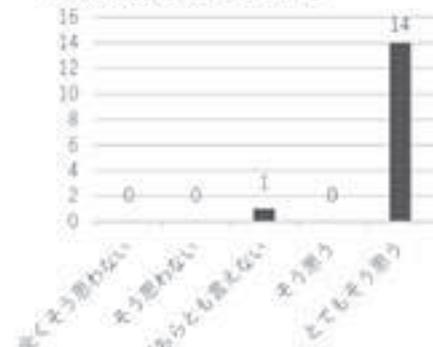
a. 適切に運営されていた。



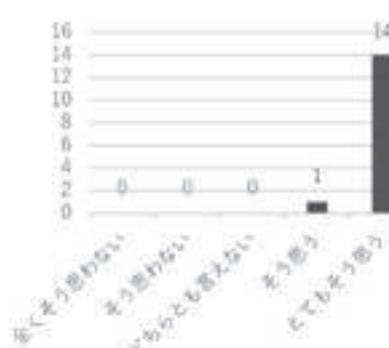
b. 目標は明確であった。



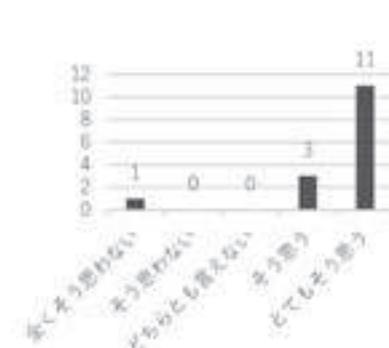
c. 教材（パワーポイント、ワークシート等）は質が高く、学習に適していた。



d. アルバータ大学講師の指導は、効果的であった。



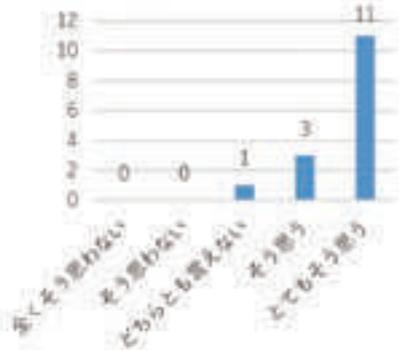
e. 各講義を進めるスピードは適切であった。



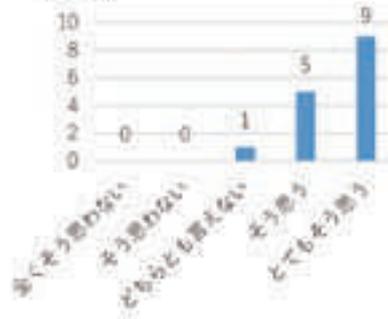


(2) 授業運営に与える効果について

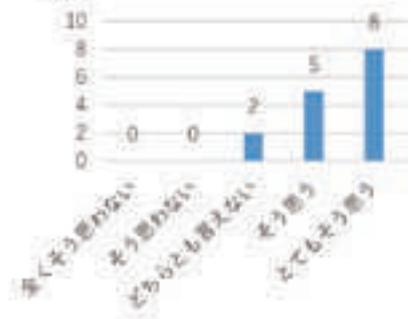
a. 本プログラムの受講により、英語による授業の専門知識が深まった。



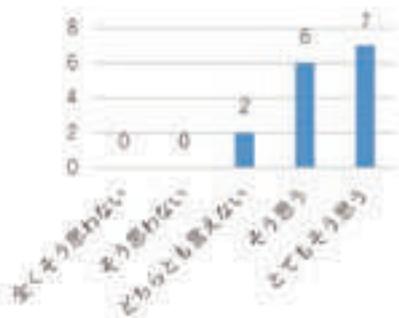
b. 本プログラムの受講により、効果的な(effectively)英語による授業に必要な技能を得た。



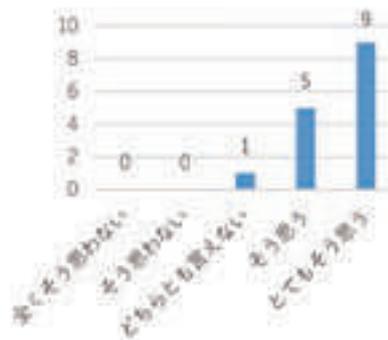
c. 本プログラムの受講により、英語による授業をより良く行うことができるようになった。



d. 本プログラムの受講により、大学教員としての職務能力が向上した。



e. 本プログラムの受講により、これまでの英語による授業の実施方法について振り返ることができた。



(3) 本プログラムの受講を通して、これまでの自身の教授法をどのように振り返りますか。

- ・ 今回の受講で何度も繰り返されていた「student-centered」の授業形態を十分にできていなかったことを実感しました。今回の受講を授業にも役立てたいと感じました。
- ・ これまでは教員から学生に一方的に知識を授ける講義 (teacher-centered) が中心であったが、本プログラムの受講を通し、場合によっては学生主体 (student-centered) の授業も有効であると感じた。
- ・ 自身の教授法は、学生時代の経験をもとにしていてアップデートが必要と感じました。
- ・ 私はまだ授業を担当していませんが、本プログラムのなかで、教師が目指す教育の成果等について、頻繁に意見交換しました。大学の講義スタイルの多くは教師が中心となって知識や経験を伝えるものですが、学生が中心となる学習をどのように取り入れるか、という課題については多くの議論がありました。消極的、あるいは関心の低い学生に悩み、授業のあり方を工夫したいと考える先生が多いことを知りました。
- ・ きちんとした教授法を学んだことがなかったため、研究室内のセミナーの延長のように捉えていたかもしれない。
- ・ 私の講義では、アクティブラーニングをずっと取り入れてきたのですが、今回の講義では、アクティブラーニングだけでなく、教員中心的教授法も含めて、効果的な指導の仕方や評価の仕方を具体的に学ぶ事ができた。この中には、これまで私の講義の中で十分取り入れられていなかったものもあるので、これらを取り入れていきたいと思う。

- ・欧米の学部レベル（大学院レベルではない）の授業での、受講者への課題の多さを参考にできると思います。
- ・学生へのサポートやエンカレッジの方法、ならびに最近のオンラインアプリなどを利用した技術など、新しい取り組みを入れていなかったことに気づき、各講義がどのような位置づけであったのか、明確にすることができるようになった。具体的には、知識を伝達する講義にも関わらず、興味をわかせるような取組を入れたりするなど、混在していたことがうかがえ、目的を見失っていたと考えられる。
- ・授業計画にもっと時間をかける必要があった。
- ・In the program, we listened to the class from the teacher Lo and guest speaker, discussed in the class, wrote the Journal and feedbacks to other colleagues. From these activities, we considered our teaching methods from different viewpoints.
- ・Currently, international students at master's program and Ph.D. program are studying in our department. I am in need to teach and guide the students in the theory class as well as laboratory work. The way of my teaching is very empirical, based on my own experiences attained while I was a student.
- ・自身がこれまで試行錯誤で実施してきた教授法の中には推奨される点もあるし、改善すべき点もあることが分かった。よい気づきの機会となった。
- ・何度か APPEMI 中に自身の授業を振り返る機会があり、いろいろな例を体験しながら考える良い機会であった。

(4) 本プログラムを通してどのような知識を得ましたか。また、その知識を今後の授業にどのように活かしたいですか。

- ・これまで名前も知らずに利用していた教育方法の名前、授業の設計方法について学びました。得られた知識は英語の授業だけでなく、日本語の授業にも応用可能なので大いに利用したいです。
- ・授業全体の組み立て方を始め、各講義回において Goal and outcome を明確にすることの重要性を学んだ。また、様々な IT ツールを使うことで効果的に授業を進められることがわかった。加えて、英語で授業を行う際、流暢に話す必要はなく、キーワードをはっきり明確に伝えることの方が重要であることを学んだ。
- ・教育効果のある教授法：英語に限らずより良い講義を考えるツールとして活かしたい。
英語でスピーチするうえでの有用な技法：意識して使うことで講義やプレゼンに活かしたい。また、今後の訓練に活かしたい。
- ・本プログラムは英語による授業のための語学学習に留まらず、さまざまな知識を得ることができました。例えば、よりよい学びのための授業形態・自己の授業スタイルの分析・さまざまなツールの活用・学生への適切な学習支援・成績の評価方法・英語への苦手意識の克服など。今後の授業では、座学に簡単な実験や小さなグループでの意見交換を取り入れるなど、学生が主体となって専門的な能力を高めていくような工夫を取り入れたいと思っています。
- ・学生主体の教授法にするための工夫や、授業の組み立て方、授業に取り入れると良いオンラインツールや教授法について多くの知識を得られた。今後は授業の組み立て方から取り入れていき、学生が主体的かつ安心して楽しく授業に取り組むことができるように努めたい。
- ・受講生へ、非常に多くの課題を課すことがよくわかりました。今後の授業で取り入れたいと思います。
- ・それぞれの講義のあり方、体系化ができるようになったと思われ、一つ一つの講義での目的と達成目標をより具体的な形で明示するように生かしたい。
- ・TPI の 5 つの要素：Transmission, Apprenticeship, Developmental, Nurturing, and Social reform. 今まで関心のなかった Social reform などの要素も意識していきたい。

- ・ In the program, we first learned how to improve my English ability to teach in English, such as pronunciation and writing in the course 'Introduction to English-Medium Instruction'. In the course 'instructional design basic', we also learned how to design a course instructional by designing the teaching instructions and learning outcome. From the micro-teaching, we also practice the instructional design. In my future course, I will also use the idea of 'instructional design basic' to design my class.
- ・ I have learned so many teaching skills about EMI, English-medium Instruction and useful clues to facilitate a student-centered learning. Moreover, I found that communication with students is important for student-centered classroom. For example, students can take a risk to do new learning activity when a teacher provides them enough space or opportunity for their new challenges. Based on what I have learned in the class, I would like to design my lecture and do my best for the student-centered learning.
- ・ 教授法の種類と特徴を体系的に学ぶことができた。今後、授業の規模や内容に合わせて、学生の主体的な学びの機会をより取り入れたい。
- ・ 実用的に英語で授業をするのに重要な知識、練習法。様々なオンラインツールを使った授業のやり方。

(5) 本プログラムで学んだことの中で、特に有用であると感じたことは何ですか。

- ・ 受講生とのコミュニケーションの取り方やグループワークの進め方に学ぶべき所がたくさんありました。また、英語について「Don't afraid」と繰り返し言われて、拙い英語でも講師とのコミュニケーションを取ることができました。私自身の英語の能力についてこの期間での向上は不明ですが、学生にも「Don't afraid」で、まずは英語で話すことを勧めたいです。
- ・ オンラインであっても（むしろオンラインであるからこそ？）、様々なITツールを活用することで効果的に授業を進められると感じた。また、英語能力を自力で向上させられる有用なウェブサイトが有用であると思った。
- ・ 本プログラムのなかで紹介された授業スタイルを学生になって体験できたことは非常に良い経験でした。また、本プログラムでは数多くの資料が提供されましたが、そのなかで特に有用であると感じたものは、①授業の準備と自己評価のためのチェックリスト（How 'CLIL' are you?）②プログラム最後のミニ講義実践時の評価項目（APPEMI Micro Teaching Rubric）③学びのステップについての解説（Bloom's Taxonomy: Three Learning Domains）です。
- ・ 日本人含む non-native の学生に対して英語で授業を行う際の留意点や授業の組み立て方法について、現在では教員個人に任されている部分が多いが、それが本プログラムを通して明確化した。日本ではあまり知られていない、オンライン上で使える、学習ツールや学生とのコミュニケーションツールを豊富に紹介していただいた。
- ・ 英語が母語でなくても（英語力が不足していても）、やり方次第でかなり効果的な講義を実現することができることを体感できたこと。リスクをとりながらも、必要以上に不安を感じる必要は無く、理解できているかどうかを確かめながら、講義を組み立てる方法論を学ぶ事ができたこと。
- ・ 岐阜大学の日本人教員（英語を教える教員も含めて）のほとんどすべてが体験していない欧米での学部レベルの講義の一端を体験できたことは、特に地域科学部の国際教養プログラム（学部レベルでの留学プログラム）へ参加する学生たちが、どのような状況なのかをおもんばかって指導する上で極めて有用なものであったと思います。地域科学部学生で、2年前にカナダに留学した学生たちが私どもに言っていた「夢にまで授業が出て来た」、「宿舎で朝起きたとき、また今日もあのすごい授業が始まるのか」との意味がよくわかりました。私たち教員は、大学院を修了後に、外国の研究室で研究するために留学する経験は豊富ですが、外国の研究室での研究生活では決して知ることのできない様々な困難に、学部レベルで留学した地域科学部の学生たちが直面したことが身をもって、非常によくわかりました。これが特に有用であると思いました。

- ・やはり一つ一つの講義での目的と、数値的に明確な指標となる達成ゴールを学生に与えることが重要であることを痛感した。これまでは、教科書全てが範囲であったが、その教科書すべてを範囲としたとしても、それを達成するためのステップを具体的に示してきてはいなかったことを改善できる点が有用である。また、最近の新しい講義に利用可能な技術などを学んだこと、学生のサポート方法等を学んだこと。
- ・講師からのフィードバック。
- ・ I think the 'instructional design basic' is most useful. It is not only beneficial for teaching in English but also useful for any courses in any language.
- ・ Everything that I learned about English-medium Instruction was a real eye opener. Teaching Perspectives Inventory survey was the most interesting, because it told me what I really want to do in my classroom and provided me useful clues for student-centered learning. Many tips shared in the guest speaker's talks were very valuable to renew my ideas about EMI and give me a new dimension to my teaching.
- ・学生の主体的な学びを支援する教授法。授業目標の明確化（具体化）。オンラインリソース等の活用による授業効率化。
- ・オンラインツールを使ったインタラクティブな授業を学生として体験できたのは良かった。

(6) 本プログラムについて、改善してほしい点は何ですか。

- ・短期間で多くの内容が詰め込まれており宿題もありますので、もう少し受講日の間隔を広めにとっていただくと内容の理解をより深めることができますと思います。
- ・年度末は多忙であるので、夏休み中（8月下旬から9月上旬）の時期の方が受講しやすいかもしれない。
- ・受講期間（週2回で3ヶ月など）に余裕があるほうが効果的かもしれない。
- ・これは自分自身の都合ですが、講義時間を確保することが精一杯で、課題をこなすことができませんでした。すこし余裕のあるスケジュールですとありがたいです。
- ・日本語でも開講してほしい。
- ・オリエンテーションで、本プログラムを通して得られることについてももう少し明確な紹介があると良いと感じた。
- ・最初の数回、ネットへの接続、必要なサイトへのログインで色々と問題が起こり、かなりの困難が発生しました。これらを回避するために、最初の2回ほどはTAを配置していただけるとよいと思います。
- ・アルバータ大学サイドではなく、本学サイドの改善点になるかもしれませんが、参加する教員の英語レベルが異なるため、事前にプレースメントテストなどでレベル分けするとよいと感じた。
- ・ありません。
- ・ Thanks for this program. I think the time and the content are perfect and useful for me.
- ・ I was very satisfied with this APPEMI. It is a pretty nice program. Joining a micro-teaching by U of Alberta teachers or joining an actual subject class (Biology or Engineering) is very intriguing.
- ・週2、3回の隔日開講が参加しやすいかも知れませんが、後期開講期間終了後に本プログラム日程を設定していただきましたが、委員会の仕事などもあり、宿題をこなす時間の確保が困難でした。
- ・もう少し日程に余裕があってもよかった。5回授業があった週は大変だった。



(7) 本プログラムについてご意見がありましたら、自由にご記入ください。

- ・日本語での授業にも参考になることが多く、非常に有益なプログラムでした。周囲の教員にも是非勧めたいです。第2弾のプログラムを楽しみにしています。
- ・今回の Denise Lo 先生はとても優れていたが（アルバータ大学で賞を受賞されているような優秀な先生。英語が非常に聞き取りやすく、授業の進め方や学生との接し方がとても上手であった）、講師によっては能力の向上はあまり見込めないかと思う。実際、本プログラム中に他の講師の英語講義へ参加する機会があったが、その講師の授業はあまり魅力的ではなかった。
- ・個人的には期待以上でした。
- ・英語による授業を予定していない先生方にもご紹介したい内容でした。ぜひこれからも継続いただければと思います。
- ・英語でのプログラムだけではなく、もっと日本語に落とし込んで理解したいと感じた部分も大きいので、特に若手への本プログラムの様な日本語講座も開講して欲しい。また、今回の受講により、他の先生方も本プログラムの様な講義は初めて受講したという方が多いという点に驚いた。大学は研究だけの場ではないため、教育する立場としての教育方針ももっと向上すべきだと感じました。
- ・上述しましたが、参加する教員の英語のレベルが違うことを利用してクラス分けを行った上で実施できれば、より高いレベルになると思われます。
- ・Online meeting with APPEMI graduates may be interesting.
- ・参加させていただきありがとうございました。とても有用なプログラムと実感しました。今回、オンラインのプログラムということで参加が叶いました。現地に行かないオンラインのプログラムでも、岐阜大学教員の教育力アップの視点から意義はあると思います。
- ・定期的にこういう機会があればいいと思う。

実際の APPEMI の運用は、1. Web 上での授業管理システムと 2. オンライン会議ツール (Zoom) を介した遠隔講義の 2 つの軸から構成され、遠隔講義では、講師によるレクチャーと密接に連携した形でのゲストスピーカーによる講演という形式で実施された。本学では学生らが使用する AIMS Gifu という受講管理システムがあるが、これに類したアルバータ大学の授業管理システムを通して、事前課題の提出や授業後の課題の提出、参加者間での相互コメントが可能な環境が提供された。

アンケート結果全体を通じて、受講満足度の高いプログラムであったことが窺える他、参加教員の多くから今後のプログラム導入の継続や次の段階のプログラム受講の希望、日本語でもこのような機会が欲しいと言った意見が出ている。プログラムの実施予算の確保というハードルはあるが、事務職員に対する自己研鑽用の教育機会の提供だけでなく、教員に向けた教授法トレーニングの受講機会を大学として提供し続けることは、当初の狙いだけでなく、何十年も講義を担当される先生方の教育手技の定期的な見直しとそれによる教育満足度向上にも貢献しうるだろう。

4. おわりに

最後に国際 IR (Institutional Research) 担当として、大学の国際性の評価について触れたい。「1. 導入の経緯」でも少し触れたが、大学の国際性の評価基準に英語 (又は外国語) による授業数が入る場合がある。また、英語による授業の提供は外国人留学生の大学決定の要素の一つであり、外国人留学生数の増加にも繋がる。

グローバル推進機構では、2015年頃 (前身のグローバル推進本部時代) から短期派遣プログラム等の促進を精力的に進めており、本学学生の海外派遣者数は徐々に増加している。また、本学の国際共著論文数の割合 (図 1) も着実に増加してきており、これは主な取組として前述した「海外協定大学とのジョイント・ディグリープログラム」等の国際協働教育の促進による効果 (学生を海外大学と共に教育する過程で発展した共

同研究の増加)によるものだと期待している。国際共著の比率の増加は、THE 世界大学ランキング(図2)の International Outlook のスコア(外国人留学生比率、外国籍教員比率、国際共同研究で構成)の変化にも表れている。また、日本版 THE ランキングにおいては国際性の指標に「外国語で行われている講座の比率」が毎年含まれている。

令和2年度は COVID-19により全世界的に人的移動がほぼ制限された。以前からの指標で評価された場合、国家方針として外国人留学生の受入許可を行ったか否かが今後発表されるランキングのスコアの差となる可能性が高い。大学における国際化の評価指標は限定的かつ定量的であるため、今回のような世界的な鎖国状況では指標として機能しているとは言い難く、平常時に戻るまでは静観するのが無難だろう。一方で、COVID-19を背景に世界的に普及したオンライン教育は対国際面では渡航費や渡航時間等のハードルが下がるという利点がある。COVID-19の影響が今後どの程度続くのか不明な現状では、今回の教授法トレーニングプログラムの導入に限らず、ICTを活用して海外協定大学と連携し学内の国際性の基盤を高めるプログラムを提供しつつ、活動状況の国内外の認知を狙った戦略的な広報活動を行うことが、本学の国際力の実質的な成長を止めない施策でないかと思う。

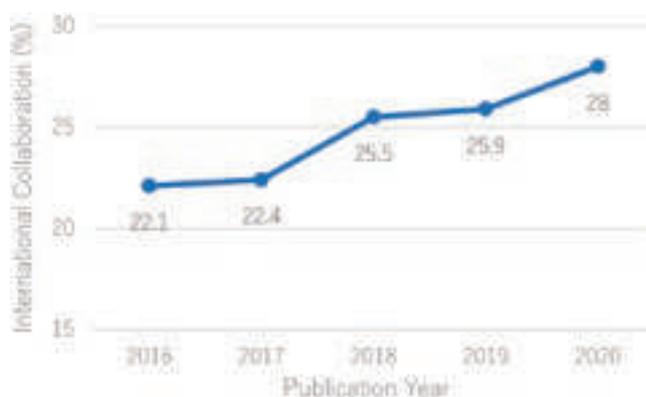


図1. SciVal による本学の論文の国際共著割合の推移
出典: SciVal, Gifu University Benchmark by Publication Year, Metric: International Collaboration より再編 (2021年4月21日時点)



図2. 岐阜大学の THE World University Rankings の International Outlook (国際性) のスコア推移
引用: <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/gifu-university> (2021年4月21日時点)

1. 令和2年度グローバル推進機構名簿

所属・職名等	氏名	運営委員会	奨学金等選考委員会	部門				国際企画部門WG	JD調整担当者会議	年報	HP	留学支援チーム	英語研修チーム	短期受入チーム	交流推進チーム	愛岐留学生就職支援 プロジェクトチーム	JDシンポジウムWG	任期
				国際協働教育推進部門	地域国際化推進部門	留学推進部門	国際企画部門											
グローバル推進機構機構長	植松 美彦	◎	◎						○							○	◎	24～4.3
グローバル推進機構副機構長 (日本語・日本文化教育センター長)	橋本 慎吾	○	○													○		24～4.3
グローバル推進機構・特任教授	三輪 真一	○			○											○	○	31.4～3.3
グローバル推進機構・特任准教授	コウ レイモンド	○		○		○							◎	○				31.4～3.3
グローバル推進機構・特任助教	松井 真弓	○		○		○	○	○	○	◎	○			○				31.4～3.3
グローバル推進機構・客員教授	柴田 大輔				○													24～3.3
グローバル推進機構・客員教授	青木 哲史				○													24～3.3
日本語・日本文化教育センター・教授	森田 晃一																	-
日本語・日本文化教育センター・教授	土谷 桃子	○				○								○				31.4～3.3
日本語・日本文化教育センター・准教授	吉成 祐子						○				○							31.4～3.3
日本語・日本文化教育センター・特任助教	松尾 憲暁				○											○		1.10～3.3
国際事業課長	北野 信哉	○	○	○	○		◎	◎	○	○	○					○	○	31.4～3.3
国際総務室長	照元 直樹	○		○	○		○	○										31.4～3.3
留学支援室長	小林 恵子	○			○	○	○	○								○		31.4～3.3
教育学部・教授	坂本 一也						○			○								31.4～3.3
教育学部・教授	巽 徹	○				○									○			31.4～3.3
教育学部・教授	野村 幸弘	○					○			○								24～3.3
教育学部・准教授	仲 潔					○					○							31.4～3.3
地域科学部・教授	合掌 顕	○				○	○				◎					○		31.4～3.3
地域科学部・准教授	笠井 千勢					○								○				31.4～3.3
地域科学部・准教授	神谷 宗明					○						○						24～4.3
医学系研究科・医学部・教授	千田 隆夫	○					○											31.4～3.3
医学教育開発研究センター・併任講師	今福輪太郎					○								○				24～4.3
医学部・看護学科・准教授	山口 琴美	○																24～3.3
医学部・看護学科・助教	佐野亜由美					○								○				31.4～3.3
工学部・教授	嶋 睦宏	○	○	○		◎						○	○			○		24～4.3
工学部・教授	久米 徹二			○	○		○		◎		○					○		31.4～3.3
工学部・教授	リム リーワ			○	○				○									31.4～3.3
工学部・教授	板谷 義紀			○														31.4～3.3
工学部・教授	伊藤 聡			○														31.4～3.3
工学部・教授	伊藤 貴司			○														31.4～3.3
工学部・教授	王 道洪			○														31.4～3.3
工学部・教授	神原 信志			○														31.4～3.3
工学部・教授	小宮山正治			○														31.4～3.3
工学部・教授	佐々木 実			○														31.4～3.3
工学部・教授	高橋 周平			○														31.4～3.3
工学部・教授	杓水 祥一			○	○				○								○	31.4～3.3



所属・職名等	氏名	運営委員会	奨学金等選考委員会	部門				国際企画部門WG	JD調整担当者会議	年報	HP	留学支援チーム	英語研修チーム	短期受入チーム	交流推進チーム	オンラインプロジェクトチーム	愛岐留学生就職支援	JDシンポジウムWG	任期
				国際協働教育推進部門	地域国際化推進部門	留学推進部門	国際企画部門												
工学部・教授	安藤 香織			○														31.4~3.3	
工学部・教授	上宮 成之			○														31.4~3.3	
工学部・教授	海老原昌弘			○														31.4~3.3	
工学部・教授	大矢 豊			○														31.4~3.3	
工学部・教授	加藤 邦人			○														31.4~3.3	
工学部・教授	瀬瀬 守			○														31.4~3.3	
工学部・教授	武野 明義			○														31.4~3.3	
工学部・教授	伴 隆幸			○														31.4~3.3	
工学部・教授	村井 利昭			○														31.4~3.3	
工学部・教授	杉浦 隆						○											31.4~3.3	
工学部・准教授	大橋 史隆			○														2.11~4.3	
工学部・准教授	小林 信介			○	○													31.4~3.3	
工学部・准教授	高橋 康宏			○														31.4~3.3	
工学部・准教授	岡 夏央			○														31.4~3.3	
工学部・准教授	新田 高洋			○		○									○			31.4~3.3	
工学部・准教授	毛利 哲也					○									○			31.4~3.3	
工学部・准教授	木下 幸治					○						○						31.4~3.3	
工学部・助教	大橋 慶介					○						○	◎					31.4~3.3	
工学部・助教	川瀬 真弓	○			○	○					○					○		2.4~3.3	
工学部・助教	ジャヒマン シュセカール			○														2.4~3.3	
工学部・助教	山田 啓介			○														2.11~4.3	
応用生物科学部・教授	小山 博之	○	○	○	◎			○								◎	○	2.4~4.3	
応用生物科学部・教授	西津 貴久	○		○	○		○	○								○	○	2.4~3.3	
応用生物科学部・教授	上野 義仁	○		◎				○									○	2.4~3.3	
応用生物科学部・教授	石田 秀治			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	岩橋 均			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	鈴木 徹			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	光永 徹			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	矢部 富雄			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	長岡 利			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	中川 智行			○			○		◎									31.4~3.3	
応用生物科学部・教授	山本 義治			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・准教授	柳瀬 笑子			○	○			○										31.4~3.3	
応用生物科学部・准教授	島田 敦広			○														2.11~4.3	
応用生物科学部・准教授	島田 昌也			○	○													31.4~3.3	
応用生物科学部・准教授	清水 将文			○	○													31.4~3.3	
応用生物科学部・准教授	小林佑理子			○														31.4~3.3	
応用生物科学部・准教授	中村 浩平					○						○		◎				31.4~3.3	
応用生物科学部・准教授	今村 彰宏					○						○						31.4~3.3	
応用生物科学部・助教	今泉 鉄平			○														1.11~3.3	
応用生物科学部・助教	広田 勲					○					○							31.4~3.3	
応用生物科学部・助教	山内 恒生			○														1.11~3.3	

所属・職名等	氏名	運営委員会	奨学金等選考委員会	部門				国際企画部門WG	JD調整担当者会議	年報	HP	留学支援チーム	英語研修チーム	短期受入チーム	交流推進チーム	愛岐留学生就職支援 コンシリアムプロジェクトチーム	JDシンポジウムWG	任期
				国際協働教育推進部門	地域国際化推進部門	留学推進部門	国際企画部門											
自然科学技術研究科・教授	海老原章郎	○		○	○				○									31.4～3.3
共同獣医学研究科・教授	海野 年弘	○																2.4～3.3
連合農学研究科・教授	中野 浩平	○		○			○			○								31.4～3.3
連合獣医学研究科・教授	浅井 鉄夫	○																31.4～3.3
連合創薬医療情報研究科・ 准教授	古山 浩子	○																2.4～3.3
流域圏科学研究センター・ 准教授	魏 永芬	○																31.4～3.3
人事労務課長	伊藤 幸保	○					○											2.4～3.3
教務課長	宮本 紀広	○					○											2.4～3.3
国際総務室国際総務係	幸脇 裕輔			○	○		○	○	○	○							○	
	津田 菜摘																	
留学支援室留学支援係	奥村 典子																	
	瀬古 道子																	
	飯田 菜穂	○		○	○	○	○				○	○	○	○	○			
	石川 誉																	
	矢島 佳奈																	

※グローバル推進機構長、委員長、部門長、リーダーは○

2. 協定一覧

●大学間協定 (20ヶ国51大学1機関)

2021年3月31日現在

	大学・機関名	国・地域名	協定締結日	授業料相互 不徴収	交換可能 学生数*
1	カンピーナス大学	ブラジル	1984.8.27	有	2
2	サンディエゴ州立大学	米国	1985.5.7	有	2**
3	浙江大学	中国	1986.4.21	有	3
4	広西大学	中国	1986.4.24	有	4
5	電子科技大学	中国	1986.7.21	有	2
6	江南大学	中国	1986.9.3	有	3
7	ルンド大学	スウェーデン	1987.9.12	有	2
8	ノーザンケンタッキー大学	米国	1990.9.26	有	2
9	ソウル科学技術大学校	韓国	1992.3.19	有	3
10	グリフィス大学	オーストラリア	1995.3.3	有	4
11	ユタ大学	米国	1997.5.28	有	-
12	ユタ州立大学	米国	1997.5.29	有	2
13	ハノイ工科大学	ベトナム	1998.6.26	有	2
14	カセサート大学	タイ	1999.8.5	有	3
15	内モンゴ農業大学	中国	2000.8.8	有	2
16	シドニー工科大学	オーストラリア	2000.8.14	有	3
17	パンノン大学	ハンガリー	2001.3.2	有	3
18	アングラス大学	インドネシア	2001.4.23	有	4
19	バングラデシュ農業大学	バングラデシュ	2001.8.23	有	2
20	エルフルト大学	ドイツ	2002.12.4	有	3
21	吉林大学	中国	2003.5.20	有	4
22	チェンマイ大学	タイ	2003.8.4	有	3



	大学・機関名	国・地域名	協定締結日	授業料相互不徴収	交換可能学生数*
23	ダッカ大学	バングラデシュ	2004.6.17	有	3
24	モンクット王トンプリ工科大学	タイ	2005.1.10	有	3
25	華僑大学	中国	2005.3.29	有	3
26	同済大学	中国	2006.3.16	有	2
27	ランボン大学	インドネシア	2006.4.25	有	2
28	内蒙古大学	中国	2007.2.6	有	1
29	木浦大学校	韓国	2008.2.26	有	3
30	パイロイト大学	ドイツ	2008.8.22	有	4
31	ベンハー大学	エジプト	2009.3.18	有	2
32	高麗大学校	韓国	2010.1.15	有	2
33	カウナス工科大学	リトアニア	2010.3.8	有	4
34	ボゴール農科大学	インドネシア	2010.12.2	有	3
35	内蒙古師範大学	中国	2011.6.8	無	-
36	ヴィータウタス・マグヌス大学	リトアニア	2012.1.19	有	2
37	ガジャマダ大学	インドネシア	2012.9.13	有	3
38	スプラス・マレット大学	インドネシア	2013.7.8	有	3
39	パリ・サクレー大学	フランス	2014.12.16	有	3
40	タイ教育省基礎教育委員会	タイ	2015.3.10	無	-
41	インド工科大学グワハティ校	インド	2014.9.21	有	3
42	マレーシア国民大学	マレーシア	2016.9.21	有	2
43	マギル大学	カナダ	2017.3.8	無	-
44	アルバータ大学	カナダ	2017.3.21	無	-
45	レイクヘッド大学	カナダ	2017.10.11	有	2
46	マリアノ・マルコス州立大学	フィリピン	2018.9.10	有	2
47	フエ大学	ベトナム	2018.11.12	有	2
48	アッサム大学	インド	2018.11.20	有	2
49	サラマンカ大学	スペイン	2018.11.26	有	2
50	リール大学	フランス	2020.4.2	有	4
51	南フロリダ大学	米国	2020.12.15	無	-
52	ブラヴィジャヤ大学	インドネシア	2021.2.23	有	2

※毎年、1学年度の間に派遣または受入可能な最大限の人数を表しています。 ※※1年2名、半期4名

●部局間協定 (27カ国1地域63学部・機関)

2021年3月31日現在

協定部局	協定大学等名	国名	初回締結日	授業料相互不徴収	交流対象者
教育学部	シーナカリンウィロート大学教育学部	タイ	2015.3.17	無	教員
	カールスルーエ教育大学	ドイツ	2015.10.21	有	学生・教員
	山西師範大学	中国	2015.12.7	有	学生・教員
地域科学部	アーカンソー大学フォートスミス校	米国	2015.6.8	有	学生・教員
	国立中央大学文学院	台湾	2021.1.14	有	学生・教員
医学部	浙江大学医学院	中国	2000.12.4	有	学生・教員
	コンケン大学医学部	タイ	2000.12.18	有	学生・教員
	忠北大学校医学部	韓国	2009.4.17	有	学生・教員
	ハワイ大学医学部	米国	2016.8.24	有	学生・教員
	ソウル大学校医科大学	韓国	2019.4.11	無	学生・教員
	シカゴ大学医学部	米国	2019.6.3	無	学生・教員
医学部・保健管理センター	南フロリダ大学医学学群	米国	2016.10.20	無 ^{*1}	教員 ^{**2}
工学部	全南大学校工学部	韓国	2002.2.6	有	学生・教員
	柳韓大学校工学系列	韓国	2010.9.29	有	学生・教員
	ベンクル大学数学自然科学部	インドネシア	2011.7.20	有	学生・教員
	サー・パラシュラムプ・カレッジ	インド	2012.9.17	有	学生・教員
	忠南大学校工学部	韓国	2013.1.18	有	学生・教員

協定部局	協定大学等名	国名	初回締結日	授業料相互不徴収	交流対象者
工学部	マドリード・カルロス三世大学工学部	スペイン	2013.7.9	有	学生・教員
	ドルトムント工科大学機械工学部	ドイツ	2014.6.23	有	学生・教員
	マングレー大学自然科学部	ミャンマー	2014.8.25	有	学生・教員
	ヤダナボン大学自然科学部	ミャンマー	2014.12.16	有	学生・教員
	メティラ大学自然科学部	ミャンマー	2014.12.16	有	学生・教員
	アダンキマティ工科大学工学部	ケニア	2014.12.16	有	学生・教員
	トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学理工学部	マレーシア	2014.12.16	有	学生・教員
	慶北大学校工学部	韓国	2015.2.27	有	学生・教員
	アメリカ国立衛生研究所国立心臓血液研究所	米国	2015.3.18	有	学生・教員
	バーデン・ヴェルテンベルク州立太陽エネルギー・水素研究センター	ドイツ	2015.3.20	無	学生・教員
	ブンハッタ大学	インドネシア	2015.7.30	有	学生・教員
	パダン州立大学数学自然科学部	インドネシア	2015.9.18	有	学生・教員
	チュラロンコン大学理学部	タイ	2015.12.2	有	学生・教員
	ニューサウスウェールズ大学	オーストラリア	2016.4.25	無 ^{*3}	学生・教員
	東ティモール国立大学工学部	東ティモール	2016.8.29	有	学生・教員
	南京師範大学 エネルギー機械工学院	中国	2017.7.17	有	学生・教員
	ダゴン大学自然科学部	ミャンマー	2017.7.21	有	学生・教員
	インドネシアイスラム大学土木工学・計画学部、数学・自然科学部	インドネシア	2018.2.23	無	学生・教員
	ブルネイ・ダルサラーム大学理学部	ブルネイ・ダルサラーム	2018.6.15	有	学生・教員
	ザンビア大学工学部	ザンビア	2019.1.30	有	学生・教員
リアオ大学教員養成・教育学部	インドネシア	2020.3.3	無	教員	
長庚大学工学部	台湾	2020.3.18	有	学生・教員	
工学部・流域圏科学研究センター	クラクフ工科大学環境電力工学部	ポーランド	2015.11.30	有	学生・教員
流域圏科学研究センター	UiTーノルウェー北極大学生物・水産・経済学部	ノルウェー	2017.9.27	無	学生・教員
インフラマネジメント技術研究センター	中国科学院水利部水土保持研究所	中国	2008.8.12	無	教員
	中国水利水電科学研究院岩土工程研究所	中国	2009.7.24	無	教員
応用生物科学部	チュラロンコン大学理学部	タイ	1994.3.15	無	学生・教員
	コンケン大学農学部	タイ	2000.3.27	無	学生・教員
	コンケン大学学部間共同開発研究所	タイ	2000.3.27	無	学生・教員
	国立獣医科学検疫院獣医科学研究所	韓国	2008.11.4	無	教員
	モンゴル国立大学地理地質学部	モンゴル	2012.10.29	無	教員
	ガーナ大学基礎応用科学部	ガーナ	2015.8.20	無	教員
	ラジシャヒ大学農学部	バングラデシュ	2016.12.27	無	教員
	南太平洋大学自然科学・工学・環境学群	フィジー	2017.12.1	無	教員
	カザン医学アカデミー	ロシア	2018.12.10	無	教員
	ハンガリー科学アカデミー農学研究センター	ハンガリー	2018.12.10	無	学生・教員
連合農学研究科	チュラロンコン大学理学部	タイ	2012.12.6	有	学生・教員
	チュイロイ大学	ベトナム	2015.6.25	有	学生・教員
	バンドン工科大学生命科学工学部	インドネシア	2015.8.11	有	学生・教員
	ラオス国立大学林学部	ラオス	2018.3.21	有	学生・教員
連合獣医学研究科	ガーナ大学基礎応用科学部	ガーナ	2015.8.20	無	教員
連合創薬医療情報研究科	カフル・エル・シェイク大学獣医学部	エジプト	2009.11.15	有	学生・教員
	タイビン医科薬科大学医・薬科学技術センター	ベトナム	2020.3.31	無	学生・教員
複合材料研究センター	EMC 2 クラスタ・IRT ジュール・ヴェルヌ	フランス	2014.3.13	無	学生・教員
地域連携スマート金型技術研究センター	台湾国立高雄科技大学先端金型研究開発センター	台湾	2019.12.27	無	学生・教員
科学研究基盤センター	タイビン医科薬科大学医・薬科学技術センター	ベトナム	2020.3.31	無	学生・教員

※1, 2 南フロリダ大学との「医療従事者交流プログラム」においては、授業料等相互不徴収：有、交流対象者：学生・教員

※3 ニューサウスウェールズ大学の同意後免除可



3. 本学の国際関連活動

●学長表敬訪問（来訪）

日付	国・地域	訪問者	目的
12.22	フランス	ジュール・イルマン在京都フランス総領事館総領事、岐阜日仏協会飯塚保江会長、杉原満理事および保井円理事	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、フランス語の講義の見学

●学長ビデオメッセージ

日付	国・地域	相手先	内容
11.1	中国	華僑大学	華僑大学創立60周年記念事業への祝辞ビデオメッセージ

●令和2年度国際関連事業予定一覧（全体）

開始	終了	名称	参加人数	主催
4月15日	3月24日	就活個別相談	19	機構
4月15日		広西大学（中国）からマスクの寄贈	-	機構
5月19日		駐名古屋中華人民共和国総領事館からマスクの寄贈	-	機構
6月17日	6月19日	オンラインによるキャリアガイダンス（日本語・英語）	10	機構
6月19日		リトアニア勉強会（オンライン）	19	工
6月24日		第1回 English Circle of Friends	18	機構
6月26日		オンラインによる夏のインターンシップ対策講座（英語・日本語）	10	機構
7月8日		第2回 English Circle of Friends	19	機構
7月15日		留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ（映像による）	45	機構（日セ）
7月17日	7月31日	令和2年度岐阜地域留学生交流推進協議会総会（メール開催）	42	岐留協
7月20日		内定者とのWEB交流会（日本語・英語）	18	機構
7月22日		岐阜・リトアニア勉強会（オンライン）	58	工
8月9日		日本語・日本文化研修留学生修了論文発表会	22	機構（日セ）
8月10日	8月21日	University of Alberta English language school（オンライン）受講	5	地域
8月12日		岐阜南ライオンズクラブから留学生へ支援金寄贈	8	機構
8月21日		日本語・日本文化研修留学生修了式	12	機構（日セ）
8月26日		アッサム大学（インド）とノーザンケンタッキー大学へ（米国）マスクを寄贈	-	機構
9月22日	9月23日	UKM-GIFU University International Symposium on Food Sciences	18	連農
9月24日	9月25日	The 5th ICCC（オンライン）	190	連農
10月1日	10月30日	（国際月間）学長からのメッセージ（動画掲載）	44	機構
10月7日		（国際月間）Google Earth VRでの海外体験	15	機構
10月7日		オンラインによるキャリアガイダンス（日本語・英語）	7	機構
10月9日	10月29日	（国際月間）国際広報展	40	機構
10月14日		（国際月間）第3回 English Circle of Friends	35	機構
10月14日	10月29日	（国際月間）協定大学の学生とのオンライン交流会（アルバータ大学（カナダ）、ノーザンケンタッキー大学（米国）、リール大学（フランス）、ヴィータウタス・マグヌス大学（リトアニア））	117	機構
10月14日		リトアニア勉強会（オンライン併用）	19	工
10月14日	11月11日	オンラインによる就職準備講座（日本語・英語）	9	機構
10月16日		インド工科大学グワハティ校とのウェビナー共催	390	機構
10月26日	10月30日	令和2年度アルバータ大学オンラインビジネス英会話研修	12	機構
10月28日		（国際月間）2020年度愛岐留学生就職支援コンソーシアム岐阜地区ワークショップ	20	機構
10月28日		（国際月間）第4回 English Circle of Friends	18	機構
10月29日		インドネシア同窓会 Graduation and Welcome Party への学長等の出席（オンライン）	67	その他
11月10日		The 8th UGSAS, GU Roundtable 2020	40	連農
11月10日		UGSAS, GU & BWEL Joint Poster Session on Agricultural and Basin Water Environmental Sciences 2020（オンライン）	40	連農・流セ

開始	終了	名称	参加人数	主催
11月11日		第5回 English Circle of Friends	15	機構
11月15日		Joint International Seminar of Xiangtan University and Gifu University on Environmental Science and Engineering	50	流セ
11月18日	12月16日	オンラインによる実践型ビジネススキル講座（一部対面）（日本語・英語）	12	機構
11月23日		第19回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会	23	岐留協
11月25日		リトアニア勉強会	9	工
11月27日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第1回）	37	機構
11月27日	3月9日	IITG × GU × UKM Collaborative Video Making Program（初回ミーティング）	21	機構
12月2日		第6回 English Circle of Friends	22	機構
12月3日	12月25日	岐阜大学・リトアニア交流の歩み展	27	機構
12月8日	12月9日	岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2020	325	機構
12月11日		シモナス・ストレルツォーバス氏著書「リトアニアと杉原千畝」講演会	86	機構
12月12日		岐阜大学リトアニア勉強会 in 八百津～岐阜大学生のリトアニア留学体験記～	20	機構
12月16日		FD 兼留学報告会	48	地域
12月16日		第7回 English Circle of Friends	15	機構
12月18日		オンライン留学説明会（1回目）	16	機構
12月21日		韓国総領事館・副総領事他来学	2	機構
12月22日		ジュール・イルマンフランス総領事学長表敬訪問	4	機構・地域
12月23日		オンライン留学説明会（2回目）	13	機構
12月25日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第2回）	41	機構
1月22日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第3回）	41	機構
1月23日		社会人OB・OGとのオンライン交流会	29	機構
1月28日		郡上市職員特別研修（異文化コミュニケーション研修）オンライン交流会・特別講義	18	機構（日セ）
2月10日		「University Leadership in Challenging Times -And the Way Forward-」に本学教員登壇（リム・リーワ教授）	-	機構
2月19日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第4回）	41	機構
2月22日	3月12日	オンライン留学（グリフィス大学（オーストラリア））	9	機構
2月24日		リトアニア勉強会	7	工
3月1日	3月12日	オンライン留学（アルバータ大学（カナダ））	5	機構
3月5日		若手・中堅研究者海外派遣プログラム報告会	23	機構
3月5日		東京大学主催 JIEPP シンポジウム登壇（小山副機構長）	115	東京大
3月8日	3月30日	アルバータ大学オンライン教育手法研修	15	機構
3月9日		Collaborative Video Making Program Final Competition	55	機構
3月12日		第4回横国大日印産官学連携人材育成セミナー登壇（上野国際協働教育推進部門長）	-	横国大
3月18日		慶応大世界展開力強化事業プラットフォーム構築事業シンポジウム登壇（植松機構長）	-	慶應大
3月25日		令和2年度国際連携食品科学技術専攻（修士課程）学位記伝達式	35	自然
3月26日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第5回）	54	機構
3月30日		International Symposium on Renewable Energy Systems	48	地創セ
合	計	70件		

※参加人数について、来訪の場合は来訪者人数



4. 大学間学術交流協定先との交流状況

種 別		教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入	
アメリカ合衆国	ウエストバージニア 大学	2018	0	0	2	0
		2019	-	-	-	-
		2020	-	-	-	-
	サンディエゴ州立 大学	2018	0	0	1	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
	ノーザンケンタッキー 大学	2018	1	1	13	6
		2019	1	3	16	6
		2020	0	0	0	0
	ユタ州立大学	2018	0	0	2	0
		2019	2	0	0	0
		2020	0	0	0	0
	ユタ大学	2018	0	1	0	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
南フロリダ大学	2018	-	-	-	-	
	2019	-	-	-	-	
	2020	0	0	0	0	
小 計		4	5	34	12	
インド	アッサム大学	2018	0	1	0	0
		2019	0	2	0	0
		2020	0	0	0	0
	インド工科大学 グワハティ校	2018	10	3	6	5
		2019	10	17	8	1
2020		0	0	0	0	
小 計		20	23	14	6	
インドネシア	アングラス大学	2018	3	27	2	0
		2019	1	4	1	0
		2020	0	0	0	0
	ガジャマダ大学	2018	1	6	1	0
		2019	10	2	1	0
		2020	0	0	0	0
	スプラス・マレット 大学	2018	4	9	1	0
		2019	1	7	5	0
		2020	0	0	0	0
	ボゴール農科大学	2018	6	14	1	1
		2019	1	3	0	0
		2020	0	0	0	0
	ランボン大学	2018	7	3	1	0
		2019	1	5	1	0
		2020	0	0	0	0
ブラヴィジャヤ大学	2018	-	-	-	-	
	2019	-	-	-	-	
	2020	0	0	0	0	
小 計		35	80	14	1	
エジプト	ベンハー大学	2018	0	1	0	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
小 計		0	1	0	0	

種 別		教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入	
オーストラリア	グリフィス大学	2018	0	0	8	0
		2019	1	0	8	0
		2020	0	0	0	0
	シドニー工科大学	2018	0	0	2	0
		2019	5	1	2	3
		2020	0	0	1	0
	シドニー大学	2018	2	1	2	0
		2019	-	-	-	-
		2020	-	-	-	-
	小 計		8	2	23	3
カナダ	アルバータ大学	2018	4	4	36	0
		2019	9	0	44	0
		2020	0	0	0	0
	マギル大学	2018	2	2	3	0
		2019	9	0	2	0
		2020	0	0	0	0
	レイクヘッド大学	2018	3	1	2	0
		2019	0	1	0	0
		2020	0	0	0	0
	小 計		27	8	87	0
韓国	高麗大学校	2018	0	0	0	0
		2019	0	0	1	0
		2020	0	0	0	0
	ソウル科学技術 大学校	2018	0	3	3	3
		2019	0	0	1	1
		2020	0	0	0	0
	木浦大学校	2018	0	0	1	3
		2019	0	0	1	2
		2020	0	0	0	0
	小 計		0	3	7	9
スウェーデン	ルンド大学	2018	0	0	0	1
		2019	0	0	1	2
		2020	0	0	0	0
小 計		0	0	1	3	
スペイン	サラマンカ大学	2018	4	0	0	0
		2019	0	0	0	2
		2020	0	0	0	0
小 計		4	0	0	2	
タイ	カセサート大学	2018	2	1	0	3
		2019	3	1	1	1
		2020	0	0	0	0
	タイ教育省基礎教育 委員会	2018	1	0	0	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
	チェンマイ大学	2018	1	0	0	2
		2019	1	0	1	3
		2020	0	0	0	0
	モンクット王 トンブリ工科大学	2018	2	1	0	0
2019		1	4	1	0	
2020		0	0	0	0	
小 計		11	7	3	9	

種 別		教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入	
中国	内蒙古師範大学	2018	0	0	0	
		2019	0	0	0	
		2020	0	0	0	
	内蒙古大学	2018	0	0	0	
		2019	0	0	0	
		2020	0	0	0	
	内蒙古農業大学	2018	0	0	0	
		2019	0	0	0	
		2020	0	0	0	
	華僑大学	2018	0	0	0	2
		2019	0	0	0	4
		2020	0	0	0	0
	吉林大学	2018	0	0	0	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
	広西大学	2018	7	1	0	3
		2019	4	0	0	8
		2020	0	0	0	0
	江南大学	2018	1	0	0	3
		2019	0	0	0	1
2020		0	0	0	0	
西南交通大学	2018	0	0	0	0	
	2019	-	-	-	-	
	2020	-	-	-	-	
浙江大学	2018	0	0	0	0	
	2019	0	2	0	0	
	2020	0	0	0	0	
電子科技大学	2018	0	0	0	3	
	2019	0	0	0	5	
	2020	0	0	0	0	
同済大学	2018	0	0	1	0	
	2019	0	0	4	0	
	2020	0	0	0	0	
小 計		12	3	5	29	
ドイツ	エルフルト大学	2018	1	0	1	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
	バイロイト大学	2018	1	0	2	1
		2019	0	1	0	0
		2020	0	0	0	0
小 計		2	1	3	1	
ハンガリー	バンノン大学	2018	0	0	3	0
		2019	0	0	2	0
		2020	0	0	0	0
	小 計		0	0	5	0

種 別		教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入	
バングラデシュ	ダッカ大学	2018	0	2	0	0
		2019	1	2	0	0
		2020	0	0	0	0
	バングラデシュ 農業大学	2018	0	1	0	0
		2019	0	1	0	0
		2020	0	0	0	0
小 計		1	6	0	0	
フィリピン	マリアノ・マルコス 州立大学	2018	0	3	0	0
		2019	0	6	0	0
		2020	0	0	0	0
	小 計		0	9	0	0
ブラジル	カンピーナス大学	2018	0	0	2	0
		2019	0	1	0	0
		2020	0	0	0	0
	小 計		0	1	2	0
フランス	パリ・サクレ大学	2018	0	0	0	0
		2019	0	0	0	0
		2020	0	0	0	0
	リール大学	2018	-	-	-	-
		2019	-	-	-	-
		2020	0	1	0	0
小 計		0	1	0	0	
ベトナム	ハノイ工科大学	2018	4	1	3	0
		2019	0	0	1	0
		2020	0	0	0	0
	フエ大学	2018	3	1	0	0
		2019	0	1	0	1
		2020	0	0	0	0
小 計		7	3	4	1	
マレーシア	マレーシア国民大学	2018	7	3	2	5
		2019	2	4	1	6
		2020	0	0	0	0
	小 計		9	7	3	11
リトアニア	ヴィータウタス・ マグヌス大学	2018	0	1	0	0
		2019	0	1	1	0
		2020	0	0	0	0
	カウナス工科大学	2018	1	0	1	0
		2019	0	0	2	0
		2020	0	0	0	0
小 計		1	2	4	0	
合 計		2018	78	92	102	41
		2019	63	69	106	46
		2020	0	1	1	0
総 計		141	162	209	87	



5. 海外オフィス・研究施設

●岐阜大学海外オフィス

設置場所	国・地域	設置時期
岐阜大学上海オフィス	中国	2009年5月
岐阜大学ダッカ大学内オフィス	バングラデシュ	2009年8月
岐阜大学スプラス・マレット大学オフィス	インドネシア	2014年12月
岐阜大学広西大学内オフィス	中国	2015年3月

●共同研究施設

設置場所	国・地域	設置部門	設置時期
ボゴール農科大学	インドネシア	天然物化学	2014年12月
スプラス・マレット大学	インドネシア	環境科学	2014年12月
ダッカ大学	バングラデシュ	生化学	2015年10月
カセサート大学	タイ	微生物学	2016年2月
アンダラス大学	インドネシア	ポストハーベスト工学	2016年11月
モンクット王トンプリ工科大学	タイ	ポストハーベスト工学	2017年9月

6. 国際共同研究等の採択実績

●（独）日本学術振興会 国際交流事業採択実施状況一覧

※該当年度内に実施された事業を掲載

種別	本学受入研究者	外国人招へい研究者	課題	期間
外国人招へい研究者事業 外国人特別研究員（一般）	工学部 板谷 義紀（教授）	アトマジャヤ・ジョグジャカルタ大学 Pranowo	低温度再生型ハイブリッド微細結晶スラリー呼吸式ヒートポンプシステムに関する研究	2020.12.25- 2021.10.25 (10ヵ月間)

●（公財）田口福寿会 国際学術交流助成金採択一欄

令和2年度においては、教育・研究の向上を図ることを目的に、学術交流協定大学との共同研究、データ収集等のための海外派遣・招へいに係る旅費助成が採択された。しかし、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により派遣・招へいが困難な状況となったことを受け、助成金については、全額を返金するものとした。

7. 留学生の就職支援・留学生の地域貢献

● 留学生の就職に対する支援、セミナー開催数

教育プログラム	開催時期	実施部局	形式	内容
ビジネス日本語教育	前期・後期	【主催】日本語・日本文化教育センター	講義	日本語資格用講座1,2 キャリア日本語講座1,2 キャリア日本語演習
オンラインによる就活個別相談(日本語・英語・中国語)	4.1-2021.3.31 随時	【主催】グローバル推進機構	相談	就職活動に関するカスタムメイドの支援
新入生向けキャリアガイダンス(英語・中国語・日本語)	4.10 10.1	【主催】グローバル推進機構	資料配付	教育プログラム(入学時からの就職活動支援)の案内
オンラインによる留学生向けキャリアガイダンス-留学生就職促進プログラムの紹介-(英語・日本語)	6.17 6.19 10.7	【主催】グローバル推進機構	ガイダンス	就職活動の進め方の指導
オンラインによるインターンシップ対策講座(英語・日本語)	6.26	【主催】グローバル推進機構	講義・実習	インターンシップの準備
オンラインによる内定者とのWEB交流会(英語・日本語)	7.20 7.29	【主催】グローバル推進機構	交流会	内定者の体験談を聞くことによる就職へのモチベーション向上
オンラインによる就活準備講座(英語・日本語)	10.14-11.11 の期間4回	【主催】グローバル推進機構	講義・実習	第1回 自己分析 第2回 企業分析 第3回 応募書類 第4回 面接訓練
愛岐留学生就職支援コンソーシアム岐阜地区ワークショップ	10.28	【共催】岐阜県、岐阜県経営者協会、日本貿易振興機構(ジェトロ)岐阜貿易情報センター、グローバル推進機構	ワークショップ	岐阜県内留学生と企業との相互理解を深める合同ワークショップ
オンライン(一部対面)による実践型ビジネススキル講座	11.18-2021.1.13 の期間6回	【主催】グローバル推進機構	講義、実習	第1回 ビジネスマナー訓練 第2回 専攻内容の分かりやすい説明方法 第3回 グループディスカッション 第4回 集団面接訓練 第5回 SPI対策 第6回 個別面接訓練
岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会	11.23	【主催】岐阜地域留学生交流推進協議会 【協力】公益財団法人岐阜県国際交流センター	弁論大会	発表者 岐阜地域留学生交流推進協議会所属の2機関(岐阜協立大学、中日本自動車短期大学)の留学生
社会人OB・OGとのオンライン交流会(英語・日本語)	2021.1.23	【主催】グローバル推進機構	交流会	留学生就職促進プログラムを活用して日本企業に就職した先輩留学生の体験談を聞くことによる就職へのモチベーション向上

開催件数：11件

● 留学生の地域イベント等への派遣実績

日時	事業名	主催者	参加人数
2020年5月-2021年1月	EF(イングリッシュフレンド)	北方町教育委員会	5

対応件数：1件

派遣数：5名

8. 令和2年度における広報資材

●国際協働教育推進関連

(1) 岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2020 in Webinar

2回目となるジョイント・ディグリーシンポジウムはオンラインで開催。

岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2020 in Webinar フライヤー (A4, 1P)



(2) 若手・中堅研究者海外研修プログラム報告会

海外機関との共同研究支援プログラムの令和2年度採択者による報告会。

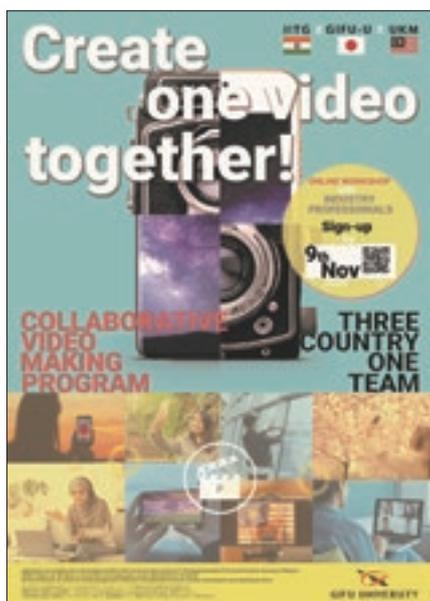
若手・中堅研究者海外研修プログラム報告会フライヤー (A4, 1P)



(3) Collaborative Video Making Program (CVMP)

ウィンタースクール及びスプリングプログラムの代替案として新規に企画されたオンラインによるジョイント・ディグリー協定校間学生交流プログラム。

Collaborative Video Making Program 学生募集用ポスター (A2, 1P)



CVMP Final Competition フライヤー (A4, 1P) 日英で作成。



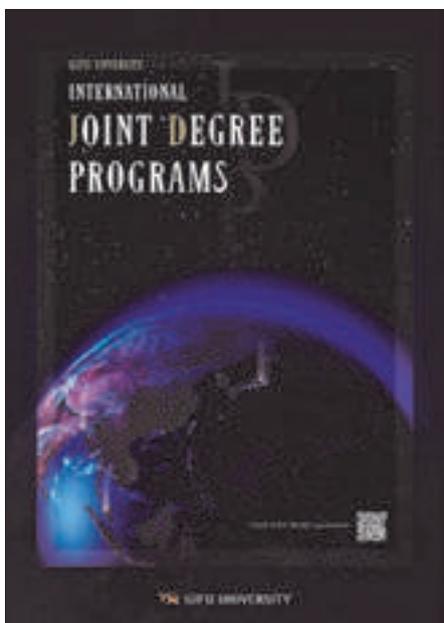
(4) ジョイント・ディグリー学生広報用資材

学生に向けたジョイント・ディグリーの魅力を紹介したフライヤーを新規に作成。本フライヤーとセットで使用する企業用のフライヤーも同時に作成。

JOINT DEGREE PROGRAMS 学生向けフライヤー (A4, 4P)



JOINT DEGREE PROGRAMS イメージポスター (A2, 1P)・クリアファイル (A4 サイズ)





●地域国際化推進関連

(1) ジョイント・ディグリー企業向け広報用資材

企業訪問時配布用として作成。ジョイント・ディグリー（JD）学生の魅力や JD を中軸とした産学連携について紹介したフライヤーを新規に作成。

JOINT DEGREE PROGRAMS 企業向けフライヤー（A4, 2P）



(2) グローカル化のための令和2年度SDGs勉強会（計5回）

学生・教職員・地域企業を対象とした地域社会の国際化に向けたSDGs勉強会を新たに実施。

グローバル化のための令和2年度SDGs勉強会フライヤー（A4, 1P）

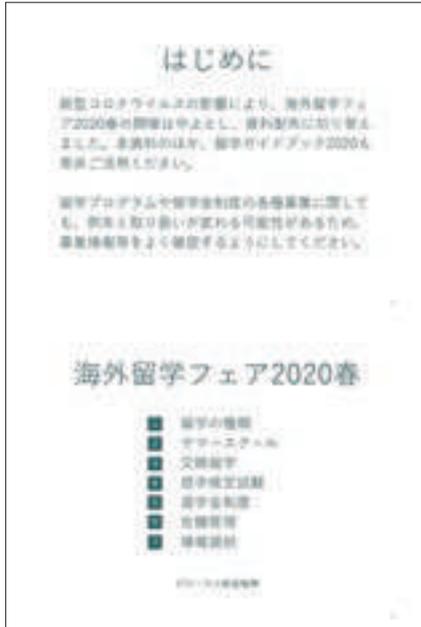


●留学促進関連

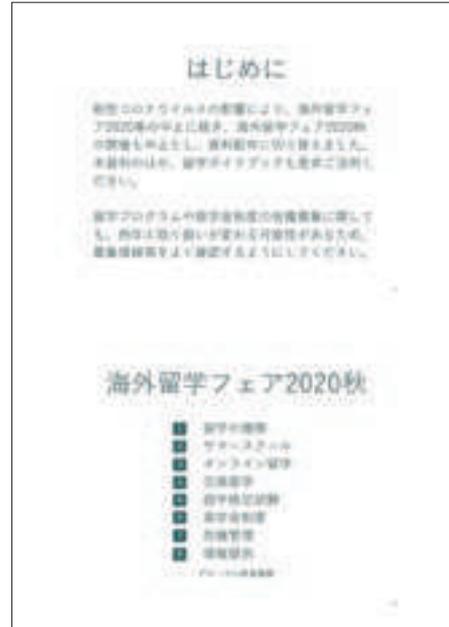
(1) 留学フェア

本学学生に向けた、グローバル推進機構主催の各種留学プログラムを紹介するイベントを、4月及び12月の2回、HPへの資料掲載により実施。

海外留学フェア2020春配布資料 (PPT 資料, 12P)



海外留学フェア2020秋配布資料 (PPT 資料, 13P)



(2) オンライン留学説明会

春休みに開催される海外協定大学へのオンライン形式の留学プログラムに関する説明会を12月に実施。

オンライン留学説明会フライヤー (A4, 1P)



(3) study abroad

本学学生に向けた留学ガイドブックを発行。留学に必要な手続きや協定大学の情報等が掲載されており、本学HP上でも公開している。

study abroad 岐阜大学 留学ガイドブック2021 (A4, 32P)





(4) サマースクール (受入)

日本語レベル 初級から N3 レベルの協定大学学生に向けた受入プログラム。募集通知後、COVID-19の状況に鑑み中止とした。

2020年度岐阜大学サマースクールポスター (A2, 1P)



(5) イングリッシュサークルオブフレンズ

本学学生・教職員・外国人留学生在英語でコミュニケーションをとる機会を提供。計7回開催。

ENGLISH CIRCLE OF FRIENDS フライヤー (A2, 1P)
日英で作成



●国際企画関連

(1) NEWS Letter

年2回発行している対外的な広報フライヤー。令和2年度は49号(10月)と50号(3月)を日英でそれぞれ発行。新入生へも配付している。

NEWS Letter 2020 October 49 (A 4, 4 P)



(2) POSTER FLYER DESIGN

国際関連のイベント等で様々なフライヤーを作成するため、学内者向けにフライヤーデザインの基礎を学ぶ勉強会を実施。

フライヤーデザイン勉強会フライヤー (A 4, 1 P)



(3) 秋の国際月間

10月に国際月間を開催し、国際交流の各種イベントを実施。

秋の国際月間フライヤー (A 4, 1 P) 日英で作成



(4) 国際広報展

前年度撮影された国際イベントや岐阜大学の美しい自然の写真を展示。展示物は日英で作成。

「国際広報展～グローバル推進機構の広報活動と岐阜大学の自然～」フライヤー (A 4, 1 P) 日英で作成

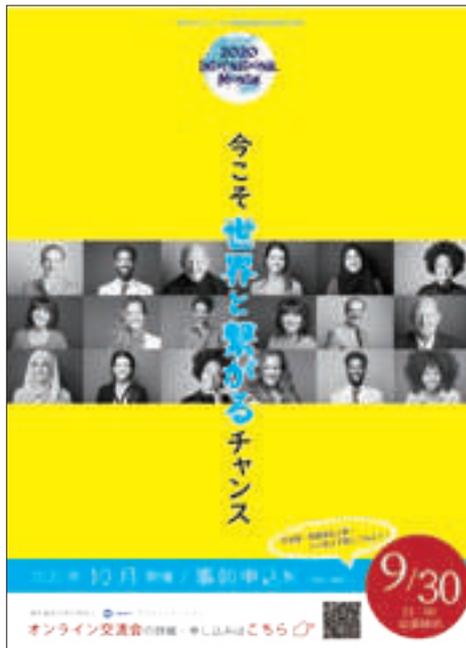




(5) 協定大学の学生とのオンライン交流会

国際月間中に実施されたイベント。リエゾン等がファシリテーターとなり海外協定大学の学生と本学学生がオンライン上で交流。フライヤーは本学学生向けと海外協定大学向けをそれぞれ作成。

「今こそ世界とつながるチャンス」 オンライン交流会学内用フライヤー (A4, 2P)



「Online Chat Meeting」 オンライン交流会海外大学用フライヤー (A4, 1P, 4大学分)



(6) Google Earth VRで海外を体験

国際月間中に実施されたイベント。海外協定大学のキャンパス紹介を Google Earth VR を使用して実施。

「Google Earth VRで海外を体験」フライヤー (A4, 1P) 日英で作成



(7) 岐阜大学とリトアニア交流の歩みパネル展

12月開催の本学とリトアニアとの交流を紹介したパネル展。展示物は日英で作成。

岐阜大学とリトアニア交流の歩みパネル展フライヤー (A4, 1P) 日英で作成



(8) リトアニア講演会

シャウレイ大学(リトアニア)より講師を迎え開催した、オンラインと本学講堂を繋ぐ形で開催したハイブリッド形式の講演会。

「リトアニアと杉原千畝」講演会フライヤー (A4, 1P)



(9) リトアニア勉強会

本学学生によるリトアニア留学体験の報告会。八百津ファミリーセンターの現地会場とリトアニアをオンラインでつないで開催。

リトアニア勉強会フライヤー (A4, 1P)



●留学生就職促進関連

(1) 留学生就職促進プログラム

愛岐留学生就職支援コンソーシアム事業で外国人留学生を対象とした各種就職促進プログラムを実施。

留学生就職促進プログラムフライヤー (A4, 1P) 日英で作成



(2) 内定者とのWEB交流会

愛岐留学生就職支援コンソーシアム事業で外国人留学生を対象とした内定者交流会を実施。

内定者とのWEB交流会フライヤー (A4, 1P) 日英で作成





(3) 岐阜地区ワークショップ

愛岐留学生就職支援コンソーシアムと岐阜大学、岐阜県、岐阜県経営者協会、日本貿易振興機構、岐阜県貿易情報センターの共催により開催された外国人留学生を対象としたワークショップ。

岐阜地区ワークショップフライヤー (A4, 1P) 日英で作成



(4) 外国人留学生のための Job Fair 2021

愛岐留学生就職支援コンソーシアム事業で実施した、外国人留学生を対象とした就職フェア。

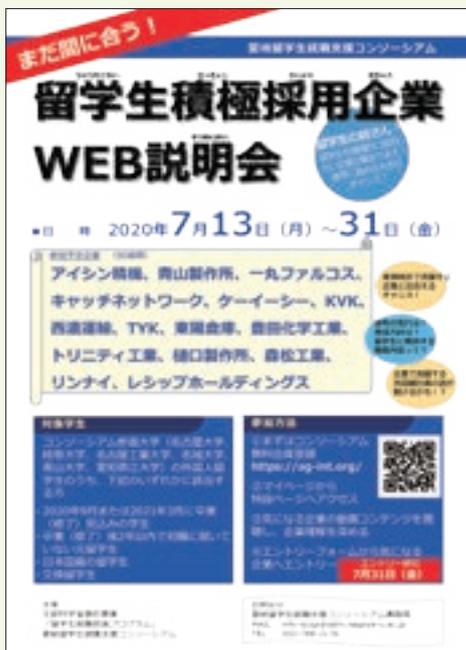
外国人留学生のための Job Fair フライヤー (A4, 1P) 日英で作成



(5) 留学生積極採用企業 WEB 説明会

愛岐留学生就職支援コンソーシアム事業で実施した、外国人留学生を対象とした企業説明会

留学生積極採用企業 WEB 説明会フライヤー (A4, 1P) 日英で作成



(6) 岐阜大学留学生就職促進プログラム

愛岐留学生就職支援コンソーシアム事業の取り組みを紹介したパンフレット。

岐阜大学留学生就職促進プログラムパンフレット (A4, 4P) 日英で作成



● 広報動画

(1) 岐阜大学ジョイント・ディグリースペシャルムービー

本学のジョイント・ディグリーについて紹介する動画。

岐阜大学ジョイント・ディグリースペシャルムービー（3分）
日本語で作成。



(2) Gifu University Promotional Video ～Introduction～

海外の一般の方向けの、本学の概要を紹介する動画。

Gifu University Promotional Video～Introduction～
（2分）英語で作成。



(3) Gifu University Promotional Video ～Why Not Gifu University?～

外国人留学生向けの、岐阜市の文化や、本学のキャンパスライフを紹介する動画。

Gifu University Promotional Video
～Why Not Gifu University?～
（1分）英語で作成。



(4) 岐阜大学紹介ビデオ～留学編～

高校生や一般の方向けの本学の留学紹介動画。高校生編と帰国報告会編の2編がある。

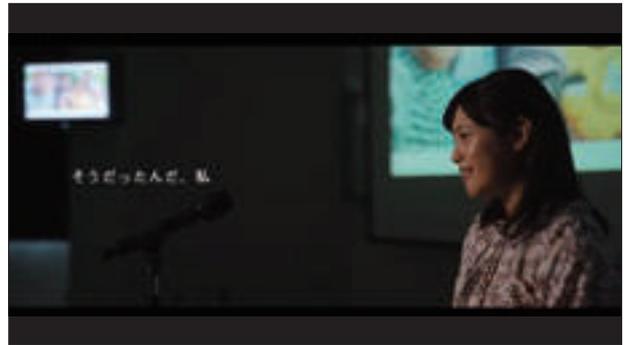
そうだったんだ、私。そうだったんだ、岐阜大学。
～高校生編～（2分）日本語で作成。





(5) 岐阜大学紹介ビデオ～留学編～

そうだったんだ、私。そうだったんだ、岐阜大学。
～帰国報告会編～（2分）日本語で作成。



(6) Gifu University Promotional Video ～be exceptional～

企業向けの本学紹介動画。日本語版と英語版をそれぞれ作成。

Gifu University Promotional Video～Introduction～
（3分）



(7) Collaborative Video Making Program

Collaborative Video Making Program に参加した岐阜大学、インド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学の学生が協力して作成した、国際交流促進動画。英語で作成。（2分半）

International Cooking (Group 1)



Best place to relax in our university (Group 2)



A daily life of a student of different countries (Group 3)



Happiness is our choice (Group 4)



編集後記

今年もついに「岐阜大学国際交流年報2020」の発刊の季節が来ました。2020年、新型コロナウイルス感染症の世界レベルでの感染拡大の影響を受け、私たちのライフスタイルは大きく変貌しました。例えば、人との接触を極力減らすため、一般社会では出勤する必要がない「リモートワーク」が多くの企業で導入され、また私たち大学をはじめとした教育現場では非対面型の「リモート講義」が導入され、現在に至っています。一年前には、これまでと違う新しいライフスタイルにあたふたした私たちですが、今では逆に「リモートワーク」や「リモート講義」のメリットを上手に活用できるヒトが増えてきており、現時点がポストコロナの新時代への一つの変曲点なのだと感じています。

では、岐阜大学の国際交流にとって今回の新型コロナウイルス感染症パンデミックはどのような影響を及ぼしたのでしょうか？ それは「岐阜大学国際交流年報2020」を手にとっていただければご理解いただけると思いますが、2020年度は国を超えた人々の移動が困難であったため、国際交流活動は大きく制限されたのはいうまでもありません。しかし、そのような状況下でも工夫を凝らした新たな形で国際交流を推進していただいている事例をいくつか目を見ると、時代が移り変わってもやはり国際交流の重要性は全く変わらないことを再認識しました。ポストコロナ時代もさらなる形で国際交流が推進されることを切に願うばかりです。

最後になりましたが、本年報の編集作業を滞りなく遂行いただきましたグローバル推進機構の皆様、また刊行にご協力いただきました各部局の皆様に心から御礼を申し上げます。

2021年 6 月

編集担当
年報ワーキンググループ
応用生物科学部 中川 智行

岐阜大学グローバル推進機構 国際企画部門 年報ワーキンググループ

中川 智行（応用生物科学部）
野村 幸弘（教育学部）
北野 信哉（グローバル推進機構）
松井 真弓（グローバル推進機構）
グローバル推進機構国際総務室・留学支援室

岐阜大学国際交流年報2020

2021年 6 月 発行

編 集

岐阜大学グローバル推進機構

〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1
TEL：058-293-3351
E-mail：kokusaik@gifu-u.ac.jp
HP：http://www.gifu-u.ac.jp/international/

印刷・製本 西濃印刷株式会社
〒500-8074 岐阜市七軒町15番地

